

第7回 地域創造学環フィールドワーク報告会の開催にあたって

2016年度の地域創造学環の開設とともに始まったフィールドワークは、県内各地の自治体、各種団体、専門家、市民のみなさまのご支援・ご協力により、地域創造学環生の多様な学びと成長の機会となってきました。2019年度から2021年度の3年間は、新型コロナウイルス感染症の拡大により様々な制約を受けましたが、昨年度（2022年度）からは徐々に以前の姿を取り戻すことができ、本日、フィールドワーク報告会を開催することができました。まずは、これまでご支援・ご協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

フィールドワークは、地域創造学環の教育プログラムの文字通りの「看板」です。新入生に「どの授業が楽しみか」とアンケートをとると、必ずフィールドワークが最上位にランクインしてきました。実際、学生たちがフィールドワーク先で様々な方々と出会い、話し合い、協働することで得る気付きは、その期待に沿うものだと実感しています。フィールドワークで見出した地域課題を卒業研究・卒業制作のテーマにする学生、就職活動の面接の際にフィールドワークでの経験を熱く語る学生、フィールドワークの中で自分の想いを確かにし卒業後の進路を選択する学生—こういう学生を多く見てきました。本日のフィールドワーク報告会でも、そういう学生たちの「未来の姿」の一端を見つけていただけたと思います。

さて、すでにご存じのことと思いますが、本学は今年度（2023年度）、本学6学部の教育成果を融合するとともに地域創造学環を発展的に取り込んだ新学部を開設いたしました。それにともない、地域創造学環の学生募集は2022年度入学生を最後に停止いたしました。そのことにより、2022年度に入学した学生が3年次を終えるとともに（2024年度末）、大部分のフィールドワークが終了することとなります。残る2年間、地域創造学環の教育プログラムの「看板」であるフィールドワークを、今までより増して実り多いものになりたいと思います。本日はそのスタートでもあります。皆さまには引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご指導いただけますよう、心からお願い申し上げます。

なお、地域創造学環のホームページ（<https://www.srd.shizuoka.ac.jp/>）には、学生参加で制作したフィールドワーク情報が数多く掲載されています。報告会・報告書とはまた違った学生たちの一面も、ぜひご覧いただければ幸いです。

2023年5月25日

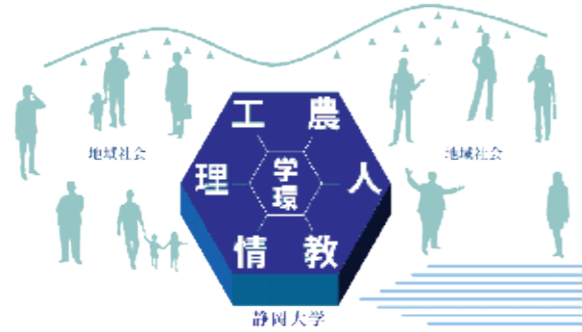
国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
水谷 洋一

目 次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ	3
2022年度フィールドワーク報告 ※報告内、学生の学年及び教員の職位等は2022年度で表記	
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 おまち	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館	14
浜松市 佐久間町	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町 商店街	22
松崎町 観光と防災	24
東伊豆町	26
伊豆半島ジオパーク 保全と防災	28
伊豆半島ジオパーク 教育	30
多世代の居場所づくり	32
学内地域連携拠点	34
2022年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声	36
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声	40

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、2016年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

現在16テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

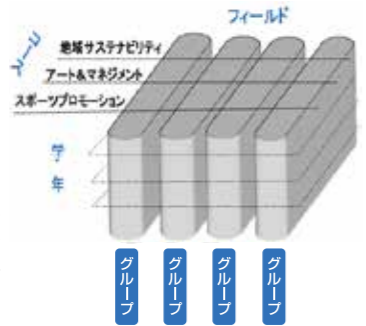
地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 3コースを融合したグループを編成し、異分野が結束して取組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

コース融合のグループ編成

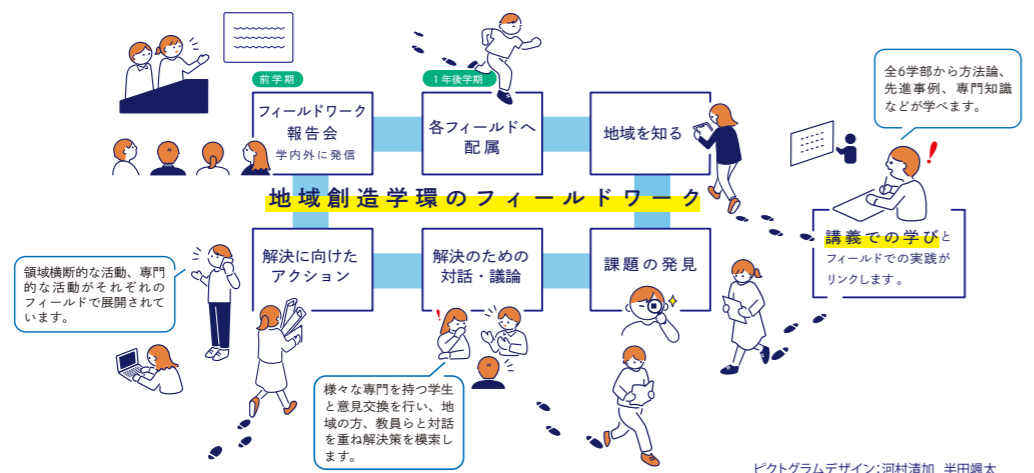
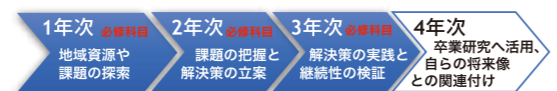
コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行っています。

※本報告書では、「地域サステナビリティ」の学生をコースの中の「地域経営」「地域共生」「地域環境・防災」の各分野に分けて記載しています。



フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組めます。



ビクトグラムデザイン:河村清加 半田颯太

地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ

- 静岡市**
 - 清水港周辺地域** 清水港周辺地域が“つながる”“ひろがる”“にぎわう”活動
 - おまち** おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出
 - 庵原地区** 地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化
 - 浅間通り商店街** 浅間通り商店街のにぎわい創出
- 焼津市**
 - 焼津市浜通り** 地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動
- 学内地域連携拠点** (静岡大学静岡キャンパス) 静大発 地域と大学の連携を広めよう！
- 伊豆半島ジオパーク**
 - 保全と防災** 伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策
 - 教育** 伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育 (SDGs/ESD) の推進
- 東伊豆町** 新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト
- 松崎町 商店街** なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出
- 松崎町 観光と防災** 防災と観光の両立
- 御前崎市**
 - 御前崎市** 御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～
- 浜松市**
 - 浜松文芸館** 私のまちの文芸世界
- 掛川市**
 - 田園空間博物館 南遠州とうもんの里** 子どもたちを呼び込むための環境づくり
- 佐久間町** 暮らし体験で交流の環づくり

静岡市 清水港周辺地域

清水港周辺地域が“つながる”“ひろがる”“にぎわう”活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域環境・防災) 2年 小林芽吹
(アート&マネジメント) 1年 鈴木愛理
(スポーツプロモーション) 3年 合田千夏、澤田美咲、鈴木美優
2年 大須賀祥真、新宮周馬
1年 日下部友香、西海土和花、平井朋美
指導教員：○准教授 石川宏之、教授 小二田誠二
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
有限会社都市環境デザイン研究所

地域概要

清水港周辺地域は、駿河湾で水揚げされた新鮮な海産物を味わえる「河岸の市」や、観覧車や遊園地、映画館等も有する大型複合施設「エスパルスドリームプラザ」、清水港の歴史や、貿易の象徴であった缶詰産業等について学べる「フェルケール博物館」、清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」など、魅力的な観光資源が多く存在する地域である。また、富士山が一望できる美しい景観、さくらももこさん原作の「ちびまる子ちゃん」の舞台、プロサッカーチーム「清水エスパルス」の存在など、多くの強みを持ち、大型外国客船の寄港による外国人観光客の存在などにより賑わっていた。

しかし、現在では人口減少や高齢化、新型コロナウイルスによる外国人観光客の減少、外出機会の減少など、その活気が失われつつあることが地域の課題である。

これまでの活動

一昨年以前

清水港の課題を整理した上で、メンバーにスポーツプロモーションコースの学生が多いという特徴から、スポーツを活かした地域の活性化を目指す案として清水港を舞台としたウォーキング企画などの提案があった。

昨年度

実際に企画を行う準備に移った。活動内容は以下の通り。

1. まち歩きによる地域の魅力的なスポットの発見、ルートの検討

実際に清水のまちを歩き、地域の人と話し合いながら、地域の現状を知り、企画におけるポイント地点や通る場所を検討した。

2. ロゲイニング企画の原案作成

企画の目的、ターゲット、各スポットで何をすれば得点とするか、景品はどうか、制限時間はどうかなど、企画を煮詰めていった。

3. 意見交換会

学生でつくった企画案を、地元の自治会の方やまちづくりに関わっている方、区役所の職員の方を相手に発表し、参加者の皆さんからのアドバイスをいただく機会を設けた。目的を一つに絞ることや、ターゲット層の明確化、協力相手の提案や、企画の名称に関するものまで、多くの助言をいただいた。会の最中や最後に実施したアンケートなどを参考に企画のブラッシュアップを行い、次年度での実施を目標とした。



清水港周辺地域



まち歩きの様子



原案作成の様子



意見交換会の様子

地域創造学環

2022年度の活動について

1. 関係者との調整

「NPO法人NPOサポート・しみず」さんに、事務、地元調整、連絡等で今回の企画に関わっていただいた。特に、木村さんのご指導の下、企画の立案・運営を行った。

参加者として「清水おやこ劇場」さんとも企画の段階からアドバイスをいただき、小さい子どもの目線にあわせた企画へのブラッシュアップを行った。

いくつかのスポットではクイズの解説を清水地区と浜田地区の連合自治会長さんと各自治会長さんや地元の方をお願いした。

スタート地点にて、清水区広報キャラクター「シズラ」の着ぐるみに見送りをしてもらうよう、清水区役所の地域総務課へ出演依頼を行った。

「静岡県県コミュニティ活動集団育成事業助成金」を申請し、採用されたことで、イベントの予算を確保した。

道中の駄菓子屋「神戸商店」で通過の景品としてお菓子の詰め合わせ、「フェルケール博物館」での入場無料券、ゴールの「ちびまる子ちゃんランド」で入場割引券やノベルティ、いくつか設定した賞の景品などを準備した。



スタート前、準備体操の様子



最初の地点、シズラとの記念撮影

2. 道具、事前マニュアルの作成、リハーサル

本番前に「清水おやこ劇場」さんと一緒に実際のルートを歩き、改善点、危険箇所、必要なものを洗い出した。そして、学生で役割分担を行い、運営サイドで利用するマニュアルやマップ、クイズ用のパネル、参加者の名札等を作成した。

3. 「スマイルロゲイニング」の実施

12月11日に、「スマイルロゲイニング」を開催した。スタートの「浜田小学校」からゴールのエスパルスドリームプラザ3F「ちびまる子ちゃんランド」までに点在するいくつかの地点でクイズやミッションを行い、そこで得たポイントの合計点を競うイベントである。当日は、一家族が遅れて参加する等のトラブルがあったものの、参加者アンケートの回答者26名の内96%の人に参加して良かったとの回答をいただくことができた。



チェックポイントにて、地元の方の解説

4. 反省

後日、「清水おやこ劇場」さんをお招きし、「スマイルロゲイニング」の反省会を行った。参加者として、いい企画だったと評価していただいたが、成功に終わったものの、おやこ劇場さんから見て安全面に不安を感じたこと、学生側が感じた準備不足など改善点も多く出てきた。今回の企画について、今後も参加したいという声もあったため、出てきた反省点をきちんと改善して来年度の実施へ臨みたい。



ゴールにて、結果発表と表彰

これから取り組むべきこと

次年度もロゲイニング企画は行う予定である。そのため、今回実際にイベントを運営して得た教訓・反省点・アンケート結果・アドバイス等を整理し、次回の企画に反映できるようにする。

また、アンケートでは、身体を動かす企画を希望する回答が多く見られたため、スポーツプロモーションコース所属の学生が多く所属しているという特色も活かし、自分たちの学んだことをどう活かせるかを考えながら、企画をより良いものとする。

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの

(地域経営) 3年 佐藤啓介
(スポーツプロモーション) 3年 勝又すず花、藤波千暖、宮川智也、油井菜夏
2年 狩生龍之介、刈谷奈々、法月優衣
1年 上田涼斗、木元朝陽、早乙女寛太、利根川悠太、西山拓真

指導教員：○准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、講師 平嶋裕輔
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人静岡市まちづくり公社
庵原地区連合自治会

2022年度の活動について

(1)「清水いはら」のロゴマーク策定

「(仮称)清水いはら道の駅」実現に向け、①「清水・庵原地区」の認知度・着目度の向上 ②社会実験事業の有効性の向上 ③「(仮称)清水いはら道の駅」の整備による庵原地区・清水区の活性化の3つを目的として、「清水いはら」を象徴するロゴマークを制作することになった。このロゴマークは、「清水いはらフェス」のポスターやチラシ、またホームページ、YouTube等のSNS、道の駅実行委員会の名刺等に使用が予定されている。そのため、地域創造学環に所属するアートマネジメントコースの学生2人にデザインの協力・作成を依頼し、9月下旬から現地調査を実施した。その後、複数回の打ち合わせを重ねた上で、最終的には、現地の実行委員会と庵原フィールドのメンバーで投票を行い、最終決定できた。そして意見を交わし、その場で出た改善点などを踏まえ修正したのち、11月28日の選考会議で最終決定した。作成されたロゴマークは、その後、各種イベント等でお披露目され、地域の起爆剤となり得ている。

(※作成に全面的にご協力いただいた、舟山海里さん・中野真白さんには、この場をお借りして心より感謝申し上げます)



(2) 中部横断自動車道開通にともなう「道の駅」実現に向けた社会実験への参加

以前から構想があった庵原地域における「道の駅」の実現に向けた社会実験の一環で庵原球場前にて開催された「清水いはらフェス」にイベントブースの出店という形で参加した。内容はノルディックウォーキング中心に構成し、コースの選定やボールの貸し出しを行った。庵原地域は山が近く自然と隣り合わせであり、歴史も深いという特徴からそれぞれの特徴が生きる眺望コース、歴史散策コースが選定され庵原の連合自治会の協力を得ながら運営を行なった。良天候での開催であったため参加者は予想より多く成功だったと言える。我々が運営したのはイベント中の全ブースのうちの一つであるため、庵原地域住民のスポーツ意識に対し適切なアプローチが出来たかの評価は難しい。しかし振り返ってみると、「自前のボールを持っている」「ウォーキングクラブに所属している」という意見があったことから、我々の予想より高いスポーツ・運動意識を持っているのではないかとこの可能性を感じられる機会でもあった。このような実際の事業展開の経験・反省を生かし、今後のスポーツライフを通じた地域活性化のより良いあり方を提案していきたいと思う。

また、このイベント時から、上記したロゴマークが使用され、各種メディア等にも大々的に取り上げられた。庵原フィールドワークメンバー以外との連携・協働は、今後のフィールドワークグループ間での展開を予感するものであった。



地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する町である。人口は約1万人で総世帯数は約3千世帯（連合自治会の数は19地区）である。庵原地区の特徴は、地区を囲う山々と、そこから眺望できる駿河湾の大海など素晴らしい自然にあふれていることである。また、傾斜があるため水捌けが非常に良く、そのような自然、地形を活かした産業も発展しており、特に、みかんやお茶の生産が盛んである。さらに、庵原球場や清水ナショナルトレーニングセンターなどのスポーツ施設が充実しており、プロサッカーチームや、プロバスケットボールチーム、海外の代表チームの宿泊所となるなど、スポーツのメッカとして期待できる地域といえる。このように庵原地区は、豊かな自然環境のもとで「食・スポーツ」が充実しており、貴重な資源のある地域といえる。そして今日は、中部横断自動車道の開通に伴って、この地区に「道の駅」を開設しようという計画が立案されている。道の駅を作り、そこに多くの人が立ち寄り、庵原地区のことをさらに認知していただくことで、さらなる庵原地域の発展につながると考えられる。我々もこの計画に賛同し、「地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化」というテーマに基づいて活動を継続中である。



これまでの活動

(1) アンケート調査

連合自治会に加入している世帯へ大型アンケート調査を実施した。その内容は、地域意識・行動とスポーツ活動との関連を問うものであった（有効回収数3,478）。分析の結果、主に以下の点が明らかとなった。①スポーツ活動自体は低調であること、②地域意識（愛着等）は高い支持があること、③集団スポーツを行う人は地域満足度も高いこと、であった。総括すると、スポーツによるコミュニティ形成を目指す場合、スポーツのしかたに留意する必要があると考えられた。また、単にスポーツをするだけではコミュニティ形成に至らないと考えられることから、予め、街づくりの意図を理解したスポーツ活動を行う事ができればコミュニティ形成が実現できると考えられた。

(2) スポーツツアーの企画・運営

アンケート調査の分析と並行して、スポーツツアーを開催した。これは、実践的な課題解決事業として実験的に試みたものである。内容は、①体力測定、②ヨガ、③ノルディックウォーキング、④ランチョンセミナー、であった。体力の保持増進を目的とした体力測定とノルディックウォーキングを取り入れた構成とし、ランチでは学生で考えたJA清水から取り寄せたみかんを使用したデザートを提供した。ただ、周知・広報に問題があり、少人数での開催となってしまう、以後の改善事項として注意する必要があると感じた。



これから取り組むべきこと

(1) 庵原地域を細分類した上での、活性化事業の展望

庵原地域は地形的に広大なエリアを有しており、産業地域や山間地域などで分類することができる。つまり、同一地域でも、生活規範や行動が異なることが予想されることから、それぞれの小地域に即した活性化事業についても検討を進めていきたい。

(2) 次世代を担う、庵原の「子ども（児童・生徒）」を対象にしたスポーツクリニックの開催

これまで、高齢者を対象にしたスポーツ事業を継続していたが、子どもたち向けの事業も展望したい。特に今日、社会課題としての部活動問題を改善していく可能性やあり方を、双方で協議していきたい。

おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (地域経営) 3年 武田小真智、中野萌、2年 山口誠人
 1年 井上文誉、漆畑璃々花、沖山寿幸
 (アート&マネジメント) 2年 外木未夏、日名子ゆり
 (スポーツプロモーション) 3年 西村実紗
 指導教員：○講師 原瑠璃彦、客員教授 平岡義和
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡おまちバル実行委員会

地域概要

◆静岡おまちバル

おまちバルとは「おまち」と呼ばれる呉服町、両替町、七間町、常盤町、紺屋町などの静岡駅周辺を中心に開催されるイベントである。静岡市に飲食店が多いことに着目し、それらを地域資源として捉え、ブランディングによる地域振興を目指している。



これまでの活動

このフィールドでは2020年度まで駒形通商店街でも活動を行っていたが、2021年度からはおまちバルでの活動に専念することになった。

◆2021年のおまちバルでの活動

静岡のおまちで毎年2回開催されている「静岡おまちバル」の実行委員会の方々と共同で「オール静岡春バルWeek」(2021、春)に参加した。静岡県立大学や常葉大学の学生と学生チームを組んで、より多くの学生や若者に向けてプロモーションを行った。

◆静岡クラフトビアバルでの活動

秋に開催予定だったバルが中止になったことを受け、2021年11月から静岡クラフトビアバルでの活動に参加させていただいた。静岡市内の3つのクラフトビール醸造所(ブルワリー)に取材を行い、記事作りに取り組んだ。醸造所ごとに3グループに分かれて自分たちで質問を考え、実際に醸造設備を見学するなどして、クラフトビールづくりに携わる方々の熱意にふれることができた。取材後は大学生目線でクラフトビールの作り手の魅力が伝わるようにインタビューの内容をまとめながら、分担して記事作りを行った。作成した記事は静岡クラフトビアバルのホームページにて「静岡のクラフトビール探検プロジェクト! 静大地域創造学環メンバーによるブルワリー取材」(<https://www.shizuokacraftbeerbar.com/>複製-クラフトビール研究所)として掲載していただいた。



オール静岡春バルWeekの学割チケットのフライヤー (2021年、春)



学生が醸造所を取材する様子

2022年度の活動について

◆静岡おまちバルでの活動

【オール静岡春バルWeek】

おまちフィールドでは前年度と同様に、今年度開催の「オール静岡春バルWeek」(2022年)に参加した。同イベントは、静岡市中心市街地、清水、草薙、用宗などで春季に開催される、地域振興を目的としたグルメイベントである。ここでは、学生が店舗開拓、広報など一部運営に携わった。この経験やこれまでに参加してきたイベントを踏まえて、学生や若者をターゲットにしたコンセプトのミニバルを計画した。

【学生主体でのバル企画】

●目標・ねらい

「スイーツでおまちを楽しむ」をコンセプトに、参加店舗等を検討していった。お酒が飲めない人でも楽しめるスイーツを通じて、若者目線でおまちを楽しむことができるバルにし、大学生や若者のバルへの参加を促すことを目指した。学生主導でバルを運営することで、バルへの理解をさらに深め、今後のバル運営に還元していくことをねらいとした。

●活動の流れ

イベント名は「秋の甘味巡り スイーツ小町」とした。同イベントは、「オール静岡秋バルWeek」の枠内で行われたものである。準備期間と開催期間では、店舗開拓、学割チケットの販売とフライヤーの作成、Facebook・Instagramでのプロモーション、また「オール静岡秋バルWeek」の抽選会等のお手伝いをさせていただいた。フィールドワークメンバーが直接学割チケットを販売する場を設けて、大学生のバル参加を促進した。

●活動の成果

このミニバルでは従来の実行委員会の方々が主催するバルイベントに参加する形に加え、学生が運営の主体となるイベントを目指した。今回の活動を通して、よりイベント運営のノウハウを知ることができた。

これから取り組むべきこと

多くのプロモーション活動のうち、特にSNSにおいて、今後はInstagramといった媒体をメインに活用して、学生ならではの視点でさまざまなコンテンツを作成し、積極的に情報の発信をしていきたいと考えている。



2022年春のオール静岡春バルWeekの学割チケットのフライヤー



スイーツバルのフライヤー (2022年)



おまちバル抽選会の様子 (2022、秋)

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (地域経営) 3年 増田裕奈、三浦真、2年 上村崇、1年 大森彩、鈴木琉斗
 (地域共生) 3年 嶋村安純、2年 井出綾乃
 (地域環境・防災) 1年 藤井陽真利
 (アート&マネジメント) 2年 鈴木唯心、榎木彩花
 指導教員：○准教授 川原崎知洋、客員教授 平岡義和
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡浅間通り商店街振興組合

地域概要

浅間通り商店街は、静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ600メートルの「浅間通り」に存在する。かつては浅間神社の門前町や駿府城下町として静岡の産業や流通の中心地であり、現在も歴史ある老舗店から新しいお店などが建ち並んでいる。通信販売の普及などによる客の減少で20年ほど前から衰退が始まり、人通りは少なくシャッターが下りたままの店もあったが、昨今、若者をターゲットとした新規出店も多く、利用者の増加がみられる。

毎年10月には静岡とタイの交流事業として、この地に生まれタイにわたって活躍した「山田長政」にちなんで長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。6月に浅間神社で無病息災を祈るために行われる「夏越大祓式・大茅の輪くぐり」に合わせて浅間通り商店街で開催される輪くぐりさんや、毎月1日に浅間神社で行われる安倍の市、お正月の商店街なども地元の人が集まり賑わい創出の場となっている。浅間神社では徳川家康が元服式を行ったとされ、大河ドラマ「どうする家康」に関連して商店街では家康にちなんで新商品の開発、イベントが行われている。



平日の商店街

これまでの活動

足元灯

2020・2021年度はコロナ禍により長政まつりや輪くぐりさんなどのイベントが中止になったため、足元灯に設置するディスプレイデザインの制作を行った。足元灯とは商店街の歩道に設置された足下を照らす照明器具で、その上部には展示台がある。ディスプレイを設置していると、商店街の方やお客さんから「綺麗だね」などと声をかけていただいた。2020・2021年度には長政まつりを行いたいという商店街の願いを込めた飾りと、雛飾りの2つを制作した。

長政まつり・輪くぐりさん

コロナ禍以前の2019年度は、長政まつりでは、子ども広場という遊び場を運営し、チョークを使った「地面におえかき」やタイの遊びなど子どもたちが楽しめる企画を行った。輪くぐりさんでは、商店街の事務所をお借りして子どもを対象とした七夕飾り企画を行った。

その他の活動

商店街をPRするための動画コンテンツの制作、定期的な商店街MAPの更新、街歩きしながら商店街の魅力を発見するフォトウォークなどを行った。



足元灯のディスプレイデザイン

2022年度の活動について

長政まつり

今年度は子どもたちが楽しめるように子ども広場を設置し、風船をほうきで転がしてそのタイムを競うタイの遊び「クワールクポン」と、チョークを使った「地面にお絵かき」の企画を行った。

輪くぐりさん

今年度は足元灯を活用した「クイズラリー」と子どもたちの思い出に残る「フォトスポット」を企画・運営した。実施した2つの企画に関する質問紙調査も同時に行った結果、企画の満足度は非常に高く、子どもと一緒に楽しむことが出来たなどの感想もあり、多くの方に楽しんでいただくことが出来た。しかし、運営方法や参加者への説明といった改善すべき点や課題が見つかったため、今後のイベント企画や運営に活かす必要性が確認された。また、質問紙調査の結果を商店街の方々と共有し、よりイベント運営の向上に努めていきたい。

Instagramの開始

商店街の魅力を伝えるために、若者を中心に利用者の多いInstagramを開始した。商店街の風景・グルメ・イベント等をテーマに、フィールドワークのメンバーが輪番制で、2023年2月から毎週水曜日に更新している。

「浅間通り商店街フィールドワーク(静岡大学)」 @sengen_fw
https://www.instagram.com/sengen_fw/

商店街の方へのアンケート

商店街の構成員の方々が商店街に対して期待していることや課題であると考えていることなどを把握し、浅間通り商店街フィールドの活動目的を決定するために、2022年12月に商店街振興組合理事の方(約10名)を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙調査の結果、大河ドラマに期待する声や、世代間の交流や情報等の共有の必要性などが寄せられた。



長政まつりの様子



Instagramのプロフィール画面

これから取り組むべきこと

商店街の方との交流

質問紙調査の結果をもとに、話し合いを含めた世代間交流を活動目的の一つとすることになった。また、商店街の方々に対し、大学やフィールドワークで取り組んできたことや気づいたこと、学んだことなどを報告する予定である。

イベントの企画

2023年度も輪くぐりさんや長政まつりが開催される予定であり、それぞれの実施に向けて企画の検討を行う。2022年度での経験や質問紙調査の結果を踏まえ、来街者が楽しむことのできるような企画を考えたい。

足元灯ディスプレイデザインの継続・更新

足元灯ディスプレイデザインの継続・更新を行う。以前は「今度こそは！長政まつり」と書かれたディスプレイを設置していた。今後は長政まつりを実施できたことや大河ドラマの影響を考慮しつつ、展示の素材や足元灯の活用方法などを含め柔軟な対応をしていきたい。

Instagramの活用

今年度新規に開始したInstagramにて、若者をターゲットに浅間通り商店街の魅力を発信している。継続的な更新やより多くの人に見てもらおう工夫を重ね、浅間通り商店街の魅力を多くの人に知ってもらえるようにしたい。



SENGEN_FW

焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域経営) 3年 芝原一貴、仲宗根利恵、2年 三村花、1年 大石凜里花
(地域共生) 3年 松本侑、2年 田畑晴花
(アート&マネジメント) 1年 大澤美潤、宮城羽那
(スポーツプロモーション) 2年 小名陽日、長瀬裕哉
指導教員：○准教授 太田隆之、教授 国京則幸
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
焼津市行政経営部政策企画課
焼津市交流推進部観光交流課
NPO法人浜の会
静岡県立焼津水産高等学校
やいづ観光案内人の会

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に1kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。浜通りエリア内は、北浜通・城之腰・鯛ヶ島の3地区に分かれおり、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的な家屋や、小路などの焼津市の歴史と文化が豊富にある地域である。

例として、明治時代に怪談小説で名の知れた小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資産だけでなく、地区ごとの夏祭りや、市民の皆さんが描いた行灯が夏の夜を照らす「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。また、浜通りの町並みの保存や活性化を目指して、行政と住民が連携し浜通り活性化フォーラムなどの活動が行われている。

本フィールドでは、NPO法人「浜の会」、焼津市観光協会、焼津水産高校、ゲストハウス「帆や」をはじめとした皆様の協力を得ながら、活動を行っている。

これまでの活動

①浜通りを含むサイクリングコースの体験

浜通りや海岸沿いを含むサイクリングコースを、実際にレンタサイクルで周った。海岸沿いには富士山が見えたり、ハート型の写真映えスポットがあったりと新たな焼津市の魅力を発見することができた。

②伊東市と御前崎市のワーケーションの取り組みの見学

新型コロナウイルス感染症が蔓延することで、観光客の人数が減少するとともに、テレワークの需要が高まっていたことに注目し、ワーケーションの受け入れに乗り出した伊東市と御前崎市の市役所から、これまでの取り組みについて話をうかがった。伊東市と御前崎市のワーケーションでは、市が抱える課題解決を視野に入れながらの話だった。2つの市の話を聞くことで改めてワーケーションの在り方の多様性を身をもって経験することができた。

③ゲストハウス「帆や」の滞在、夜のまち歩き

ゲストハウス「帆や」に滞在し、しずおか焼津信用金庫の方に浜通りの歴史などについて話を伺うとともに、ワーケーションや宿泊するにあたっての課題点や今後の帆やの活用方法を議論した。また夜の浜通りをまち歩きをすることで、街灯の少なさや車の通りなど、滞在の際の現状と課題点と考えられることを発見した。

④焼津水産高校の学生とインスタ映えスポットの探索

若者をターゲットとして浜通りの魅力を伝える上で、「インスタ映え」に注目した。そこで、浜通り周辺のインスタ映えスポットと考えられるポイントを焼津水産高校の生徒の皆さんと探索し、実際に写真を撮った。レトロな雰囲気やカツオのイラストの壁などを使ってインスタ映えするような場所を見つけることができた。



焼津市浜通りの様子



伊東市での聞き取り調査



ゲストハウス「帆や」での活動の様子

2022年度の活動について

①焼津水産高校とのワークショップ

昨年度行ったフィールドワーク活動で撮影した「浜通り周辺でのインスタ映え」をテーマにした写真をもとに、若者に向けた浜通り周辺の魅力を発信する際にどのような写真が有効か、焼津水産高校の学生とグループワークを行った。

話し合いの中で、古き良き浜通りの町並みが魅力的でありもっと若者向けにも発信すべきという意見や、そのような町並みの中でも、「焼津漁港親水広場ふいっしゅーな」のような新たなフォトスポットなどもできて、新たな魅力ができたといった意見が出て、活発な話し合いができた。

また、地元の高校生の率直な意見を聞けるのは、自分たちにとって刺激的な経験でもあるため、今後も同年代以外と関わる機会を大切にしたい。



ワークショップの様子

②あかり展の準備+参加

新型コロナウイルス感染拡大により数日延期があったものの、3年ぶりの開催及び参加となった。

あかり展の準備では、浜の会さんをはじめとする有志の方々と、当日使う行灯づくりの手伝いをした。集まった方々の地元愛の高さを改めて感じたとともに、よそ者である自分たちがどのように関わり、浜通りの活性化のために向けた取り組みが行えるか改めて考える必要があると感じた。

そして、あかり展当日は、3年ぶりの開催ということもあって賑わいを見せていた。コロナ禍での開催にあたって若干の規模縮小はあったものの、浜通りの住人同士のコミュニティの場になっており、家族ぐるみで話す様子などがうかがえた。また、参加者何名かに聞き取りも行い、初めての参加になる方は「地元の人々が大切にしてきた行事であることが伝わる、地元住民が参加型で楽しんで海辺の町らしい行事」と仰っていたり、コロナ禍以前から参加し続けていた方からは規模縮小を悲しむ声があったりした。



あかり展での聞き取り調査

③浜通りのまち歩き

1年生を迎えての初めてのフィールドワーク活動で、浜通りのまち歩きを行った。昔の地図と現在の町並みを見比べながら、1年生は浜通りの現状を知り、2・3年生は改めて浜通りの課題を認識する機会になった。

また、今年の1年生は全員焼津市民だったこともあり、これまで学んできた地元史とも改めて比較しながら現状把握を行うことが出来た。

これから取り組むべきこと

2022年度は、予定していた外部地域の調査等の活動が行えず、活動回数が少なく終わってしまった。また、活動の中で、自分たちの今後の浜通りの理想とする形がはっきりしていないことで、活動に一貫性が持てなかったと考える。これらの本年度の反省を踏まえ、2023年度は以下のことに取り組むことが目標である。

■2022年度に実行できなかった、浜通りと地理的特徴や文化が似ている地域の現地調査及び浜通りとの比較による、活性化へのヒントを得ること

■浜通り住人や焼津市の職員の声を聞き、今後の浜通りが目指すものを改めて考える

また、焼津市は食資源が豊富であり、浜通りは「磯自慢」の本店や食品加工事業所などがあるものの、食資源を活用した活性化の動きがあまり起きていないように思う。そこで、浜通りにおける食資源を活用した活性化の可能性についても、検討していきたいと考えている。

そして、地域創造学環としてのフィールドワーク活動の終了に向け、今年度は浜通りに関わる方々とも、より密接な関係を築きたいと考えている。地域を愛する浜通りの方々に認めていただける存在でありたい。

私のまちの文芸世界

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (アート&マネジメント) 3年 中野真白、増元明日菜
 2年 田中奏大
 1年 白田奏美、小笠原凜、山本陽大
指導教員：○講師 占部史人、講師 立花由美子
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

平成27年よりリユース浜松内の4階および5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした施設。

館内では浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存し、収蔵品の常設展・企画展を開催している。

身近に文芸を学ぶ・楽しむ場、文芸に触れ、多くの人々と語り合う場にふさわしい環境づくりを進めている。

これまでの活動

①広報活動

浜松文芸館の知名度向上を目的として、ポスターやチラシの作成を行った。特にポスターは新聞にも掲載され反響を呼んだ。

②ワークショップの開催

若者に文芸の楽しさを知ってもらうために、これまで3つのワークショップを開催した。

1. 対象を年齢ごとに分け、中高生には合作俳句、小学生には宝探しや物語の穴埋めを中心とした企画を行なった。
2. 言葉に対して親しみをもってもらうために、「七夕と俳句」をテーマにワークショップを開催した。小学生が考えた願いのこもった夏の俳句を、短冊に書いて飾るというイベントで、子どもたちに俳句を楽しんでもらうことができた。
3. 昨年から2回開催した「吟行DEススメ」では、「吟行×浜松×マップ」をテーマに、オリジナルマップを作成した。まち歩きを通して浜松の魅力を再発見することができた。

③俳句ガチャの設置

「俳句ガチャ」とは、「合作俳句」を気軽に体験できる企画である。クリエート浜松の1階と5階にガチャを設置することで、浜松文芸館への来場者を増やすことができた。リピーターの獲得もでき、今後も続けていく予定である。

④オリジナルキャラクターの作成

浜松文芸館のキャラクターとして、「俳人(はいと)くん」と「ことばちゃん」を作成した。俳人くんは等身大パネルも展示されている。

⑤クリアファイルと冊子の作成

浜松文芸館や合作俳句、オリジナルキャラクターの説明が載っている冊子と、冊子の表紙が動いて見える「スリットアニメーション」を楽しめる仕組みのクリアファイルを作成した。



クリエート浜松



活動をまとめた展示



俳句ガチャ



オリジナルキャラクター

2022年度の活動について

オリジナルワークショップ「吟行DEススメ」の再開催

昨年度に実施した“浜松市内を探索して魅力を感じたものを、俳句として詠む「吟行」”をテーマとしたワークショップが大変好評であったため、前回の反省点を踏まえ、内容をブラッシュアップした2回目のワークショップ「吟行DEススメ」を開催した。

①第一回開催後の振り返り

実際にワークショップを行ってみて良かった点や反省点をフィールドワークメンバーで話し合った。

◆反省点

- ・アンケートを用意し、参加者の意見を聞くことでより良いワークショップにしていく。
- ・参加者を集めるための広報ができなかった。
- ・活動内容の詳細を伝えづかったことや、会場の準備が遅れてしまったことなど、事前準備が足りなかった。
- ・あらかじめ設定していた時間を大幅に超えてしまったことにより、進行が遅れてしまった。

これらの反省点を踏まえて、次回必要なポイントはアンケート作成や広報、時間設定を含む綿密な事前準備とし、以下の準備を行った。

②第二回開催に向けた準備

◆実行したこと

- ・アンケートの用意
- ・計画的なチラシの作成、近隣学校への配布、掲示
- ・綿密なタイムスケジュールの設定
- ・フォーマットのアップデート

③ワークショップの実施

これらの準備を経て、実際にワークショップを実施した。当日は雨天であったが、開始時間を遅らせたところ、天気が回復したため実施できた。

参加者は浜松市内を散策して、気になったスポットで写真を撮り、オリジナルマップを作成した。



参加者の作品

④ワークショップの振り返り

2度目のワークショップを終えて、イベントの本質的な部分も見えた。2回目のワークショップを終えて、メンバー同士で意見交換を行った。ワークショップでは、綿密に事前準備をしたことから、計画通りに進められたことに加え、想定していなかったアクシデントにも臨機応変に対応できた。また、市街地の散策を通して得られた発見から活動における視野がさらに広がった。次期に向けてどのような準備が必要かということを考察することができた。

ショーケースの設置

活動を行うだけで終わってしまうのではなく、フィールドワークでどのようなことを行っているのかを、浜松市民の方に“知っていただく”ことを目的として2回のワークショップを通して作成された作品を展示する場をショーケース内に設けた。

それに合わせて、これまでに行なってきた活動の展示スペースも展示方法を工夫するなどしてアップデートした。

これから取り組むべきこと

①私のまちの文芸世界

昨年設定したフィールドワークテーマを踏襲し、ワークショップを通して再発見した浜松の魅力をメンバーがアウトプットする取り組みを考えている。

前期：浜松市内でのリサーチを重ね、メンバーによる創作活動を行う。

後期：作品展示という形で成果報告を行う。

②浜松文芸館以外の施設やイベントと連携、便乗する

浜松文芸館の周辺に視野を広げて、フィールドワークの活動の認知度を高め、周辺の施設とのつながりをつくる。創作活動やワークショップなどの活動を通して地域のクリエイティビティを活性化させるような取り組みを計画している。

浜松市 佐久間町

暮らし体験で交流の環づくり

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域経営) 3年 齋藤しずく、竹田有那、1年 桑名瞭徳
(地域共生) 2年 河野茉奈、1年 金城奈津希
(アート&マネジメント) 3年 落合歩美、2年 大草実優、眞野瑠子
1年 大木琴寧、佐藤萌
指導教員：○准教授 祝原豊、教授 江口昌克、教授 正木祐史、教授 板倉美奈子
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
浜松市天竜区佐久間協働センター
佐久間パンキンレディース
浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）

2022年度の活動について

【URAKAWA Oldies Festivalへ参加】

佐久間でヘアサロンを営む方が主催した音楽フェスに参加し、会場受付や音響係などのお手伝いを行った。地元の小学生や出店しに来ていた参加者の他に、来場者の方たちとイベントを楽しみながらお話を伺い、様々な人と交流を深めることができた。



アワビの貝殻のワークショップ

【ワークショップの企画・開催】

佐久間で養殖されているアワビの貝殻を使ったシャカシャカカード作りのワークショップを佐久間の小学生を対象に企画・開催した。養殖アワビの周知活動になったとともに、地域の子供達や学校との交流の輪を築くことができた。

実際のアワビ事業について学んでもらうため、佐久間町のマスコットキャラクター「さくまる」を主人公とした朗読劇での学習活動も行った。

シャカシャカカードとは、枠の中にビーズやアワビの貝殻を入れ蓋をしたカードで、振ったり傾けることで内容物が動き視覚・聴覚・触覚的に楽しむことのできる制作物。



サクッとさくま アワビ特集

【サクッとさくまの制作】

2022年度のサクッとさくまは計2冊発刊し、前期と後期に訪れた場所をもとに佐久間のおすすめスポットの記事とメンバー紹介を掲載した。また、佐久間で養殖されているアワビについてワークショップで行った内容を掲載したアワビ特集号を制作した。

【SNSの広報】

より効果的にInstagramを運用できるように、投稿画像の工夫やハッシュタグの使い方を見直した。

地域概要

佐久間町は1956年に昭和の大合併によって1町3村を合併して誕生した。さらに2005年に浜松市と合併して現在の浜松市天竜区佐久間町となっている。人口は2,759人（令和5年3月1日現在）である。国内最大級の佐久間ダムが有名な地であり、自然に囲まれたのどかな地域でもある。アクティブに活動する方が多く、NPOや地域団体活動が盛んに行われている。その中でも地域最大のイベントであるフェスタさくまは、新型コロナウイルスの影響で近年はオンライン開催となっているが、地域の名産品などが並び大きな盛り上がりを見せる。少子高齢化や人口減少などの問題を抱える中でも人の温かさを感じ、地域内の交流盛んな一体感のある地域である。



佐久間の風景

これまでの活動

【交流の環づくり】

佐久間めぐりやイベントを通して出会った方々との関係を築き、様々な方々と交流が生まれることで、新しい活動や佐久間の魅力を見つけていった。

【サクッとさくま制作】

観光スポット・食べ物・人など、テーマごとに情報を詳しくまとめた広報誌サクッとさくまを作成した。記事には地域の方へのインタビューや活動内容を掲載し、大学生視点での佐久間の魅力を取り上げた。完成後は佐久間の図書館や交流センターに設置させていただいている。

【SNSの広報】

Instagramを利用して広報活動を行った。静岡大学の学生や佐久間フィールドに興味のある方をターゲットにして活動報告と佐久間の紹介を投稿した。

佐久間フィールドInstagram



【佐久間巡り】

佐久間ダムのような観光スポットのほか、街歩きを実施して佐久間の魅力的なスポットを探した。



インスタグラム、サクッとさくま



佐久間巡り

これから取り組むべきこと

2022年度の活動は、以前より活動のテーマとしている「交流の環づくり」を目標にFWへ取り組んだ。これまでの活動で私たちは様々な地域イベントや活動に参加させていただき、人との繋がりや構築や佐久間への知見を広めてきた。しかし活動を体験させていただくことが多く、主体的な活動ができなかったと感じた。昨年度は積極的な活動を心がけ、既存の交流関係の中で地域の方の活動をお手伝いするという方面でアプローチを行った。特に佐久間町で養殖に挑戦しているアワビの貝殻を使ったワークショップでは、学生が主体となり地域の子供を対象に活動することができた。

広報活動に関しては、昨年度に拡大した広報誌、SNS、ポスターなどの広報手段に加え、特に注力する広報誌「サクッとさくま」の送付先を増やすことができた。今まで同様に外部から来た大学生の視点で地域の人へ佐久間町の魅力を発見・広報していく。また私たちの活動を知ってもらうツールの一つになるよう地域の人に需要のある内容や構成を目指していく。

昨年度の活動を踏まえて2023年度も継続して「交流の環」をテーマに能動的な活動を行っていく。今後も地域の方々との信頼関係を維持・構築し、佐久間の方々の主催するイベントや活動に協力していきたい。またアワビの貝殻を使用したワークショップは継続して活動を行っていき、前回の反省を活かしてより効果的な活動になるよう現地調査を進めていく。佐久間町で活動する浜松いきいき協力隊の方々の活動を見習い、学生主体の企画も視野に入れている。

「外部から来た大学生」である私たちは、現地に住んで実際に活動する方々と同じような佐久間に密着した活動を行うことは困難である。しかし外部の大学生だからこそその視点や新鮮さを活かし、今後もアワビや佐久間を取り上げたワークショップなど活動を通して地域の方々との交流の環づくりに注力していきたい。

子どもたちを呼び込むための環境づくり

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの

(地域経営) 2年 川野桂汰、1年 岩田啓佑、西村愛未
 (地域共生) 3年 生駒亮仁、2年 阿部ひなた、1年 今西志帆
 (地域環境・防災) 3年 村岡蒼汰
 (アート&マネジメント) 3年 舟山海里、1年 石上すみれ
 (スポーツプロモーション) 3年 宮本幸輝、2年 三國花、宮下真彩、1年 市川菜々
 指導教員：○特任助教 川崎和也、教授 池田恵子、講師 彭宇潔

フィールドワーク実施協力者

NPO法人とうもんの会
 蓮舟寺のみなさま

※○は責任教員

地域概要

「田園空間博物館南遠州とうもんの里総合案内所」(以下、**とうもんの里**)は、掛川市の南西部にある施設である。掛川市・袋井市・磐田市の南部に広がる田園地帯を「とうもん」と呼ぶ。「とうもん」という言葉は、「稲面(とうも)」または、「田面(たおも)」がその由来とされている。美しい田園風景や豊かな自然、温かい地域の人々、伝統ある農村文化がとうもんの里の魅力である。

とうもんの里を運営するのが、2006年に地域住民らが中心となり設立した「NPO法人とうもんの会」である。とうもんの会は、とうもんの里を拠点に、農業体験、食加工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農水産物・加工品のPR販売などの活動を行っている。こうした活動を通じて、地域の農業や農村の魅力を伝え、とうもんの里を訪れる人々のふれあいを創り、農業の保全や地域活性化につなげていくことを目的としている。



とうもんの里の風景



フィールドワークのメンバー

これまでの活動

田園風景の保存と農村の伝統文化の継承などを目的に活動をするとうもんの会では、「**農業を知らない子どもたち**」を活動のターゲットのひとつにしており、次世代を担う子どもたちをいかに巻き込むかが大きな課題のひとつである。こうした課題を背景に、とうもんの里フィールドワークでは、「**子どもたちを呼び込むための環境づくり**」というテーマを掲げて、フィールドワークに取り組んでおり、地域の歴史、自然、伝統文化、農業、人々の暮らし、といった、遠い昔から受け継いできたふるさとを「**農業を知らない子どもたち**」に繋げていくために、とうもんの里を通して地域の魅力発信を行ってきた。

横須賀まち歩き

新たに加わった1年生が、とうもんの里周辺エリアについて理解を深めること、多角的な視点で今後の活動地域を見つめることを目的として、横須賀地区の探索を行なった。地域の方々からたくさん声をかけていただき、自然豊かで人も温かい街だと実感し、より愛着が湧いた。



横須賀まち歩きの様子



キッズフェスの様子

キッズフェス

とうもんの里に子どもたちを呼び込むために、キッズフェスを行った。大きな壁に自由に絵を描く「**チョークアート**」や穴の空いたフレームを自然の風景にかざし、好きなように絵を完成させる「**フォトフレーム**」など5つのブースを設置した。

夕食作り

全員で協力して、とうもんの里で売っている地元の食材を使って夕飯を作った。とうもんの里でお世話になっている名倉さんからの料理の豆知識を教わりながら、バランスの取れた美味しい料理をみんなで囲んで食べる時間はとても心が温まった。



夕食作りの様子

2022年度の活動について

2022年度は、とうもんの里において、とうもんの会の方やそこに訪れる農家の方々を中心に、多くの方と関わりながら、「とうもん」の魅力を発見、学習してきた。

また、そこで発見、学習したことと共に、「**子どもたちを呼び込むための環境づくり**」というテーマのもと、子ども向けのイベントであるキッズフェスを企画・実施した。2022年度は子どもがとうもんの里を訪れるためには保護者の方の協力が必要であることに着目し、とうもんの会の方々や訪れる子どものみならず、その保護者の方も楽しめるような企画を考えた。

さらに今までよりもイベントの参加人数を増やすことなどのイベントの規模を大きくし、より多くの子どもたちがとうもんの里に関わる機会となることにも力を入れた。

キッズフェス企画・準備

キッズフェスに向けて、多くの子どもが楽しむことができるように、工作、フォトフレーム、玉入れ、トランプ、チョークアートの5つのブースを考えた。年齢に合わせての工夫や、他のブースとの位置関係やバランスについても検討した。

怪我人の発生や天候の悪化といった、もしもの場合を想定して打ち合わせを入念に行い、実際に直前の予定変更や急な雨にも対応してイベントを続行することができた。また、キッズフェスの準備をしていく中で、大学生自身もとうもんの里の自然を再発見することができた。

キッズフェス内容

とうもんの里に子どもたちを呼び込み周辺の自然を知ってもらうため、子どもが自然とどのように触れ合うことができるのかを考え、子どもたちが自然と関わりながら自由に遊べる場作りを行った。子どもたちは普段できないような遊びを楽しんだり、工作やトランプに真剣に取り組んだりしていた。子どもならではの思いがけない発想や年齢による遊び方の違いに気づくことができた。また、保護者とコミュニケーションも取ることができ、写真を撮ったり話したりしており好意的であった。途中、天候悪化によりブースの配置換えを行ったが、事前準備のおかげでスムーズに対応できた。

子どもが遊びに対してどのような反応をするかをよく観察することができ、来年度以降にやるべきことを明確にすることができた。



これから取り組むべきこと

①イベントの企画・実施

昨年度行った「キッズフェス」から学んだことを生かし、継続的に子どもたちを呼び込める環境づくりにつながるようなイベントの企画・運営を、学生主体で行っていく。

②個人の探究活動

昨年度から、個人がとうもんの里や周辺地域に様々な視点から興味を向ける、探究活動を進めてきたが、今年度はその取り組みをさらに深化させ、個人探究で吸収したことをチームの成長につなげることができるように取り組む。

③地域に残る継続的な活動にするための取り組み

来年度のフィールドワークが終了した後も、これまで学生が実施してきた「キッズフェス」などのイベントを、とうもんの里で継続的にできるように、イベントマニュアルの作成を検討している。

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの

(地域経営) 3年 川村優和、杉山愛、脇坂大陸、2年 伊東錠太郎
(アート&マネジメント) 4年 永島幸奈
(スポーツプロモーション) 3年 府川駿介、宮崎純士郎
2年 石川青空、鈴木壮悟、三谷柀次
1年 勝亦彩乃、小出康士郎、横山透真

指導教員：○特任助教 川崎和也、教授 水谷洋一、講師 平嶋裕輔

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

御前崎市総務部企画政策課
一般社団法人しずおかスポーツプロモーション
御前崎市観光協会

地域概要

静岡県内陸部最南端に位置する御前崎市は、人口31,181人（令和3年12月末）の自治体である。2004年4月1日、御前崎町と浜岡町が合併して御前崎市が誕生した。市内には「浜岡砂丘」や「御前崎灯台」のほか、「御前崎マリナーパーク」「海鮮なぶら市場」「渚の交番」「あらさわふる里公園」など、さまざまな名所・施設がある。また年日照時間が国内で最も長いなど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサーフィンの世界大会も開催されている。

御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小・衰退などの諸問題に直面している。2045年には住民の5割近くが65歳以上の高齢者になると予想され、その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題も懸念される。それらの問題に対して、御前崎市では、①『活力』のある仕事・人材づくり、②『魅力』あふれる発信・交流づくり、③『希望』ある子育て・活躍の場づくり、④『安心』ある地域づくりの4つを基本戦略に掲げて、市民・行政・企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。



これまでの活動

「御前崎スポーツ振興プロジェクト」は、国と御前崎市との地方創生推進事業として2018年からスタートした事業である。市民・学生・企業・団体・行政などが連携し、御前崎市のスポーツ環境を活かして、交流人口の拡大、地域経済の活性化、市民活動の活性化、市民の健康増進などを図ることを目標としている。

私たちは「御前崎スポーツ振興プロジェクト」と連携して、2018年10月から御前崎市でフィールドワークを行っている。御前崎市を訪れて様々な施設・名所を視察したり、現地の方々から話をうかがったりしながら、これまで以下の活動に取り組んだ。



(1) 御前崎市合宿型フィールドワーク（2019年9月25日・26日）

御前崎市で1泊2日の現地実習を実施。私たちが企画する「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」を実現するために、自転車で市内の各所を視察したり、私たちの企画について専門家の方々などからアドバイスをいただいたりした。

(2) 「U14御前崎NEXTA CUP2019」でのイベント開催（2019年12月29日）

第2回U-14御前崎ネクスタカップで、全国からやって来る中学生たちにとって御前崎市での滞在がよい思い出となるように、キックターゲットの企画・運営および豚汁の提供を行った。

(3) おまえざきサイクリー（2021年3月20日）

御前崎市内のスポットを自転車で回りながらポイントやスタンプを集めて競う「おまえざきサイクリー」を市や観光協会の協力を得て開催した。計画、予算立て、スポットや景品の交渉などで実践的な学びを得ることができた。

(4) フライングディスク体験会（2021年6月12日）

御前崎市民の健康づくりや教育などに役立てることを目標に、体験会を実施し、その活かし方を検討した。御前崎市役所の方々など、市内の各分野の専門家の皆さんに体験していただき、フライングディスクを今後どのように活かしてゆけるか意見や助言をいただいた。

2022年度の活動について

2022年度は、御前崎市のシティプロモーション事業の一環として、御前崎市のスポットを訪れ、御前崎市の魅力発信に向けた動画作品の作成とSNS等による情報発信に取り組んだ。



〈6月30日・7月17日 フットゴルフ・マリンスポーツ体験会〉

「自分たち自身が御前崎市の魅力に触れる」という名目のもと、御前崎で行われているニュースポーツであるフットゴルフや、カヌーなどをはじめとするマリンスポーツの体験をした。2日間とも天候に恵まれ、とても楽しい時間を過ごすことができた。メンバーの中のほとんどが初体験であったが、それでもなおここまで楽しめるというこれらのスポーツのすごさを実感した。また、日照時間が長く、天気が良く、きれいな海もあるという御前崎市の屋外のスポーツを行う上でのポテンシャルの高さを再確認することができた。心の底から御前崎市の魅力を感じ、楽しむことのできた2日間であった。



〈10月15日 ストライダー・エンジョイ・カップ〉

全国各地で開催されるストライダー・エンジョイ・カップの運営ボランティアに参加。今回たまたま御前崎市で大会が開かれるということで、当日のイベント運営の手伝いを行った。1年生にとってはこれが初のフィールドワークであった。今回私たちが割り振られた仕事は、大会の盛り上げ。参加者たちは幼い子どもたちなので、大学生のフレッシュさで楽しませてあげてほしいとのことだった。全国で開かれているだけのこともあり、参加者も裏方の人数も多かったが、それに圧倒されることなく全力で声を出し盛り上げに徹することができた。盛り上がり自分たちもとても楽しめたが、それはイベント運営において大切なことであると感じた。また、参加者が笑顔になっているのを見てとても嬉しく感じた。運営する側の楽しさを実感できた瞬間だった。

〈12月10日 あらさわふる里公園&御前崎灯台〉

SNSにて御前崎市の魅力を発信するための写真を撮るために、あらさわふる里公園と御前崎灯台を訪れた。あらさわふる里公園は展望台などもあり、景色がとても綺麗で時間がゆったりと流れるような場所であった。地元の味「夢咲牛」も味わせていただくことができた。口の中でとろけるように柔らかく、とても美味しかった。この味があるなら御前崎市の夢はきっと咲くだろう。そんな味わいであった。

御前崎灯台は、2021年に重要文化財に指定され、全国でも有数の登ることができる灯台で、私たちも実際に登ってみた。御前崎中の海が一望でき、とても晴れやかな気分になった。また、海に沈む夕日は圧巻の景色だった。是非日本全国の皆さんがここを訪れてほしい、と心から思った。

今年行った活動は、ビデオにまとめて御前崎フィールドワークのInstagramにアップロードした。そこから御前崎市に興味を持った方が訪れてくれることを期待したい。



学生たちが作成した動画の一部

これから取り組むべきこと

これまで私たちは、外から人を呼ぶことに重点を置き活動を進めてきた。このような活動は今後も引き続き行っていくが、加えて自身らが内側から魅力を深めて知ることの重要性に気づいた。静岡に長年住んでいる人であっても御前崎にそのような魅力があること、あるいは他にどのような魅力があるのか詳しく知っている人は少ない。さらに、近頃はコロナ禍であったこともあり、たくさん人を呼び込んだ行事の開催などには感染予防等、注意しなくてはならないことが多く我々としても通常よりも困難な点が多かった。以降は、アフターコロナとしてよりアクティブな活動も視野に入れながらさらなる魅力を実際に訪れて探し、SNS等を利用して内側から見た魅力を外側へと発信する動きを強めていきたいと考えている。ただ、この発信を進めていく際には表面的に見える部分と現地の人々から見た良さをどちらもおり混ぜ反映させることでよりリアリティがあり、キャッチーな広報活動ができると考えている。多角的な視点を持ち、魅力を発掘する作業から人を惹きつけることのできる発信の仕方等、こだわりを持ち活動をしていきたい。

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (地域経営) 3年 山本みう、2年 佐藤快成、1年 松岡大輝
 (地域共生) 3年 高橋奈那、2年 赤井佑奈、富樫みさと、村宮汐莉
 1年 古田采音
 (アート&マネジメント) 3年 稲垣望美、1年 梅田夏希
 指導教員：○准教授 牛場智、教授 阿部耕也、教授 杉山康司
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 松崎町企画観光課
 松崎町総務課
 松崎町商工会
 静岡県立松崎高等学校

地域概要

『花とロマンの里』 松崎町

松崎町は静岡大学から車で約3時間半、人口約5,900人の、西伊豆エリアに位置する町で、伝統的工法で保存されるなまこ壁や歴史的な建造物が立ち並びます。町を見渡してみると、川沿いに咲き乱れる桜や田んぼを活用した花畑があり、温かい気持ちになれます。

松崎町は、「the most beautiful villages in Japan」(日本で最も美しい村連合)の加盟地域であり、町の美しい景観を外に発信するほか、地域資源を再発見したり、町の景観を保護したりする活動が活発に行われています。

松崎町の魅力は景観だけではなくありません。松崎町は桜葉の生産量が日本一で、全国シェアの約7割を占めます。そのため、町のお店には多くの桜葉を使用した食品が並んでいます。また、松崎町は海に面していることから、海の幸を堪能することもできます。



なまこ壁



俳句の町



桜葉餅

これまでの活動

□ 活動目標・テーマ

私たちのフィールドワークのテーマは『好きを咲かせる』です。松崎町の魅力や素材全体が土となり、松崎町に関わっている方々が種になります。そこへ私たち学生が水となり松崎町の魅力を伝えるとともに、課題を発見し解決することで、種である松崎町に関わっている方々の松崎町への「好き」の気持ちを咲かせることを目標に日々活動しています。

□ これまでの活動



魅力発信

商店街の方々との交流を通してインタビューを行い、店主さんたちの素敵な人柄に焦点を当てた商店街パンフレット「てんしゅさんぽ」を作成しました。

中高生との交流

松崎中学校、松崎高校の生徒とワークショップを行い、松崎町の魅力や課題について話し合う機会を設けました。また、松崎高校の文化祭に参加するなど、松崎町の若者とのつながりも大事にしています。



イベントへの参加

棚田のライトアップイベントや棚田フェス、秋まつりなどに参加し、松崎町内外の方々との交流を深め、松崎の伝統を体験しました。



テーマイメージ



パンフレット表紙

2022年度の活動について

商店街のパンフレット制作

4月：パンフレットの仕上げ・完成

昨年度の大きな活動であった「商店街のパンフレット制作」の最終的な仕上げを行いました。文字数や誤字脱字の添削を、掲載させていただき店主の方と確認をしながら行うため、時間を要すステップでした。



7月：パンフレットの配架

できあがったパンフレットを、まずは店主の方に直接お渡ししました。その後、町外の配架場所を話し合い、道の駅や商業施設、役所等を選定、交渉の末、配架することができました。

高校生の居場所づくり

9月：高校生との協働プロジェクト

松崎高校へ訪問してプレゼンを行い、今年度から共に活動してくれる高校生を募りました。6名の高校生が協力してくれることとなり、現在一緒に活動しています。



1月：高校生とのミーティング

何をしたいかを松崎高校生目線で考え、「高校生の居場所づくり」を行っていくことが決定しました。居場所探しとしてまち歩きを行い、その後、資金調達や居場所の雰囲気・備品に関する話し合いを行いました。

完成したパンフレット



目次



店舗紹介ページ

高校生との活動



空き店舗視察の様子



高校生とのミーティングの様子

これから取り組むべきこと

高校生との関わりを経て、若者が感じている松崎町の課題に焦点を当て解決を図っていきたくと考えています。松崎町で生まれ育った若者にしか分からない松崎町の課題や問題、改善点について真剣に向き合い、松崎町についてより多くの魅力を発見し、松崎町内外に発信していきたいと考えています。

□ “居場所づくり”の完成へ

2022年度の後期から、高校生との関わりの中で、放課後の居場所が欲しいという声が上がったことをきっかけに、高校生だけでなく高齢者の方や主婦の方など多くの住民が日中も利用できるような“居場所”を作ろうと考え高校生と協力し計画を始めました。今後は以下のようなスケジュールで進めていき、年内完成を目指していきたいと考えています。

・主なスケジュール予定

- 4月 空き店舗の利用申請 & 清掃
- 5月 補助金申請、高校生の募金開始、主な備品の確定
- 6月 主な備品の発注
- 7月 備品配置、運営方針の確認と確定
- 8月 運営方針に沿った人の募集
- 9月 住民への広告・宣伝等
- 10月 スケジュール調整期間
- 11月 OPEN (仮)



高校生とのミーティングの様子

☆11月のOPENを目指しますが、その後も改善を図り最終的に理想の形に近づけるように頑張ります。

最後になりますが、私たち学生の活動を快く引き受けてくださっている松崎町の方々のご厚意に心から感謝申し上げます。短い間ではありますが、今後も松崎町の地域活性化を目指し、微力ながら協力させていただきたいと思っておりますので、是非ともよろしくお願いいたします。

防災と観光の両立

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (地域経営) 3年 橋ヶ谷有沙、2年 桂木健伸、木下皓貴
 (地域環境・防災) 3年 田丸結珠、1年 前川愛依、吉田さくら
 (アート&マネジメント) 3年 川嶋梨々花、1年 廣沢希実
 (スポーツプロモーション) 2年 山下笑花
 指導教員：○准教授 原田賢治、准教授 山本隆太
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 松崎町企画観光課
 松崎町総務課
 松崎町立松崎小学校
 松崎町立松崎中学校
 静岡県立松崎高等学校
 松崎町西区、中区、北区のみなさま

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、観光地として有名な港町である。

海底火山により形成された不思議な地形・海などの自然風景や、国指定重要文化財の岩科学校などにみられるなまこ壁など、見所の多い地域であり、駿河湾に面した豊かな漁場からの海の幸や国内シェア7割を誇る桜葉の塩漬けなど、食の魅力にもあふれている。

しかし、海沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には約7分で最大15mという大きな津波被害が想定されている。町内は細い道が多く、高齢化も著しいことからソフト・ハード面ともに防災施策への取り組みが急務である。



◀右：雲見の足湯
左：岩科学校



▲なまこ壁

これまでの活動

防災訓練の実施

松崎町西区の津波避難タワーへ避難する地区において、地震発生時に通れなくなる恐れのある狭い道を封鎖して避難訓練を行い、津波避難タワーの設備紹介を行った。

災害時を意識した行動の促進と、防災施設の把握により災害時の住民の主体的な対応力を向上させる目的で行ったが、実際には防災施設や用具の使い方を把握していない住民が多かったため、緊急時に誰でも使えるような普及活動を行う必要があると分かった。



観光防災マップの作成

2020年度に松崎町西区・中区・北区の住民の方々から収集したクチコミを元に防災マップを作成した。具体的には、避難時における危険箇所や要注意箇所の情報を掲載した。

また、2021年度には観光情報と防災情報が一体となったマップを作成し、オンライン上での観光情報と防災情報の閲覧を可能にした。アイコンや簡略化した道で観光客が観光地である松崎町をより分かりやすくするとともに、施設の防災基本情報に加えて施設への避難の仕方や道順を動画・画像にして避難の手助けとなるものになった。



小中学校での防災講座

松崎小学校でDIG、松崎中学校でHUGという防災講座の授業に参加した。

HUGでは実践的な避難所での運営の疑似体験を行い、DIGでは災害時の危険箇所や避難方法を理解する目的で行った。小中学生に防災についての関心や意識を持ってもらうことができ、大学生が教育に参加してもらうことが良かったという声をいただいた。



2022年度の活動について

これまでは主に防災を中心とした活動を行っていたが、2022年度からは松崎町内にある観光資源に着目し、観光を中心とした活動に変更した。観光地としての魅力を発信していくことを目的としている。そのために、松崎町に住んでいる人にも住んでいない人にもその魅力を知ってもらうことから始めた。

スタンプラリーの実施に向けた準備

松崎町に住んでいる人に魅力を再発見してもらうことを目的に、町内の小学生を対象としたデジタルスタンプラリーである「まっざき魅力発見！webスタンプラリー」の実施に向けた準備を中心に活動した。松崎町にある主な観光地を全て訪問し、その場所について理解を深めた。

さらに、対象地となる場所の選定のために小学生に対して、町内の観光地に関する認知度などのアンケート調査を行った。それをもとに、スタンプラリーの対象地を決定した。

また、スタンプラリーを実施することをより多くの人に知ってもらうために、チラシの作成等も行った。これらを踏まえて3月末に1週間の期間を設け、スタンプラリーを実施した。



▲完成したチラシ



▲実際の投稿



▲各スポットに配置したQRコード

Instagramの開設

松崎町に住んでいない人にも魅力を知ってもらうことを目的に、松崎町観光と防災フィールドのInstagramアカウントを開設した。毎週末に食や風景などの観光に関する情報や町の防災の情報を発信している。

これから取り組むべきこと

2022年は防災を中心としていたが、今年からは観光資源に焦点を当てた活動に現在取り組んでいる。観光地としての松崎町の魅力を発信するためのスタンプラリーを計画している。また、Instagramを開設し、週に1度の投稿を行っている。

今後取り組むべき具体的な活動

①スタンプラリー

実施後、参加者からのフィードバックの結果を元に今後継続可能かどうか、松崎町との連携で規模を拡大していけるのかを検討していく。

②Instagramの更新

閲覧されやすい時間を探り、半年ほど投稿している。今後も継続してより閲覧者の知りたい情報を投稿していきたい。

私たちだけではなく、住民も知らない松崎町の魅力を発見し外部に発信する役割を担い、コロナ禍が明けた松崎町の観光を盛り上げるべく、取り組みを考えていく。

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの

(地域経営) 3年 中垣乃彩、2年 池田康太、高野美羽音、山田海斗
1年 菊地美瑚、佐藤正樹

(地域共生) 3年 竹下智也
(アート&マネジメント) 3年 石田百香、1年 入井優希奈、竹田朱里
(スポーツプロモーション) 2年 北嶋茉智、1年 森千紜

指導教員：○教授 阿部耕也、准教授 牛場智

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

NPO法人ローカルデザインネットワーク

地域概要

東伊豆町は、伊豆半島東部に位置する漁村である。私たちが主に活動の拠点としている稲取地区は、港町の美しい景色や、金目鯛などの美味しい食べ物が特徴的だ。朝市では、地域の特産品を使用した商品が売り出されており観光客や地域住民で賑わう活気ある場所となっている。温泉地であるため観光業が盛んな地域である。

海だけでなく山もあり細野高原は春は山菜をとることができ、秋になるとスキが一面に広がり美しい景色が見られる。草原として維持するために毎年山焼きも行われている。

また、稲取は雛の吊るし飾り発祥の地である。毎年1月20日から3月31日にかけて「雛の吊るし飾り祭り」が開催されている。素戔鳴(すさのお)神社では、神社の118段の階段に雛人形と雛の吊るし飾りが飾られている景色が見られる。イベントとしてはキンメマラソンがあり、毎年2000人程の参加者で賑わっている。

受け入れ先の代表である荒武様は稲取の日常的な風景に魅力を感じ、これからも守っていくために空き家改修・活用を行っている。東伊豆は移住者率が高いものの、高齢者が多く子供の数が少ないのが現状であり、そこをどう改善していくかがこれからの課題である。子育て支援に力を入れており「ベビーファースト宣言」や「保育留学事業」を行っている。関係人口をどう増やすかがカギを握る。



稲取の景色



雛の吊るし飾り

これまでの活動

キンメナーレ (2021)

稲取を拠点に活動するプレイヤーさんと東伊豆で暮らす人々をつなげる街歩きイベント。

東伊豆学生サミット (各年)

東伊豆で活動する他大学や稲取高校の生徒と交流し意見交換を実施。

ダイロク通信 (各月)

フィールドワークでの活動を地域の情報紙であるダイロク通信で発信。

NEWHAKU (2022)

東伊豆案内看板の作成。地元の子供、高校生らと交流しながら、朝市前の看板を完成させた。

何でも屋 (2023)

町役場、地元へ根付く和菓子屋、農家のお手伝い。地元の方との交流の機会になった。

成立学園高校合同フィールドワーク (2023)

東京の高校生に地方国公立への進学を考えてもらうと共に、稲取の地の魅力を高校生の視点から新たに発見することができた。



「何でも屋」の手伝いの様子



成立学園高校の生徒との街歩き

2022年度の活動について

NEWHAKU

朝市前に掲示しているライブペイントに代わる新しい作品の制作

デザインから考え、町役場の方へ企画の説明、稲取高校生・掛川工業高校生とワークショップを行い、完成させた。

乳白色

×

新しい箔・拍

白いキャンパスに町の人々の
思い思いの色を重ねてほしい

新しい箔を新しい拍で
心機一転



見本



実物

【工夫】

- 完成した作品を防水保護シートで覆い、老朽化を防止する
- 東伊豆の形で黒板塗料を塗り、フリー掲示板として使用
- インフォパックを並べ、イベントのチラシやピラを自由に置くことが可能
→よろず情報の掲示板として活用し、交流のきっかけに。



これから取り組むべきこと

今年度行われた「NEWHAKU」を通してイベントの告知が不十分であったという反省があった。そのため次回からSNS上の告知のみだけでなく、現地の人にも知ってもらうための策を考えていきたい。

これまではフィールドワークでは稲取に重点を置いて活動してきたが、これからは東伊豆全体に活動の域を広げていきたいと考えている。また、地域の魅力を発信しながら学生1人1人のやりたいことを実現させたいという意見が出た。そのため、今年度は看板学生向けインターンシップ、東伊豆マルシェを組み合わせた企画を行う予定だ。

地域創造学環終了とともに2024年度にフィールドワークが終了してしまう。ただのフィールドワークとして終わらせず、自分たちの活動に責任を持って地域と関わっていきたい。

伊豆半島ジオパーク 保全と防災

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域環境・防災) 3年 片川拓巳、木村瑠羽
2年 吉田智美

指導教員：○教授 小山真人、准教授 山本隆太、講師 内山智尋
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
一般社団法人美しい伊豆創造センター ジオパーク推進部
伊豆半島ジオガイド協会
西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会
浜松市学校生活協同組合
静岡県立浜松工業高等学校

地域概要

伊豆半島は、かつてのフィリピン海プレート上に生じた海底火山群がプレート運動によって本州に衝突・陸化して現在の形になり、現在もなお活発な地殻変動や地震・火山活動が続いている地域である(図1)。そうした特徴的な成り立ちを反映した多くの地質学的資産と、それらが育んだ独自の生態系や歴史・文化遺産、並びにそれらを保全し後世に伝える人々の活動が認められた結果、2018年にユネスコ世界ジオパークに認定された。

「見慣れた地形・風景には、全て意味がある」— 伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の特徴的な自然とそこに育まれた地域社会を可視化する場である。ジオパークとは、地域の自然遺産を通して大地(ジオ)、生態系(エコ)、歴史・文化(ヒト)の3つのつながりをより深く理解し、それらを観光や教育などに活かすことによって地域社会の持続的発展を促すプログラムである。また、自然環境の保全・保護や防災教育への貢献もジオパークの重要な課題のひとつである。



(図1) 火山活動が作った堂ヶ島(西伊豆町)の景観
出典：伊豆半島ジオパーク
<https://izugeopark.org/geosites/dogashima/?cid=A01>

これまでの活動

本フィールドでは、伊豆半島ジオパーク推進協議会(現・美しい伊豆創造センター)や関連組織と連携しながら、伊豆市内の森林環境モニタリング手法の開発(2016~18年度)、西伊豆町の津波防災に関する知識・意識の普及啓発(2018年度~)、浜松市と湖西市における浜松・浜名湖ジオパーク構想に基づくジオツアーの開発(2020~21年度)、狩野川の水質調査(2021年度)を行ってきた。

西伊豆町では、主に「防災まち歩き」というイベントを企画・実施してきた。防災まち歩きでは、防災科学技術研究所が提供する「eコママップ」というWeb上の地図共有サイトを用い、参加者みずから屋外を散策しながら気づいた危険箇所などの情報をスマホやタブレットから入力し、地域の防災情報を共有・更新していく。2020年度はコロナウイルスの影響で住民を集めた活動はできなかったが、2021年度には西伊豆町の地域住民を対象として、同町の仁科地区内の津波危険区域における防災まち歩きを実施した後、ふりかえりと意見交換を行なった。

水質調査は、過去に環境基準の未達成年があった狩野川の水質改善を図るための基礎データを得ることを目的として実施している。2021年度には、狩野川の本流と支流の一部、支流近傍のワサビ田で採水し、分析を行った。

2022年度の活動について

2022年度は、西伊豆町沢田地区において主に小学生を対象とした防災まち歩きを対面方式で実施した。西伊豆町は津波災害だけでなく、地震災害、洪水・土砂災害など様々な自然災害のリスクを抱えた地域であり、地域住民の防災意識向上が必要である。しかし、前年度の活動で、災害に意識を向けさせるだけでは自らが住む土地に対して過度な恐怖心を抱くようになってしまったという課題が浮上していた。そのため、22年度は自然が引き起こす災害だけでなく、自然が生み出した美しい景観も紹介することで、住む土地に対する愛着心も育み、災害に対しては過度な恐怖を抱かず冷静に対処できるようにしようと考え、企画・実行した。その結果、参加後のアンケートでも自分が普段接している景色の背景を知ることができて良かったなどの肯定的な意見が見られるようになった。

狩野川水系の水質調査では、前年度と同様の項目である亜硝酸イオン・マグネシウムイオン・カルシウムイオンの定量分析に加え、硝酸イオンの定量と蛍光物質の定性分析を行った。その結果、上流域は一般的な河川の値と同等であり、排水などの影響はみられなかった。一方で、本流の下流部やそこに合流する支流は、一般的な河川の値より溶存イオンの濃度が高い傾向にあった。また、蛍光物質による分析においても人工物由来である増白剤のピークが確認できた。これらの結果から、下流域の一部は排水などの汚染の影響を受けている可能性があることが分かった。



(図2) 防災まち歩きの様子(西伊豆町沢田地区)



(図3) eコママップで防災情報を共有

これから取り組むべきこと

今後も西伊豆町の協力を得ながら、引き続きeコママップを使用した防災まち歩きなどの活動を継続していきたい。その際には、災害に関する情報のみを与えず、その土地の景観といった観光面のアプローチも忘れないことや、気づいて欲しいことや感じて欲しいことがきちんとわかってもらえるようなまち歩きにすること、想定外の通信・端末トラブルに備えてWebサイト上だけでなく紙媒体でも活動に参加できるようにすることなどがポイントと考える。

水質調査は季節変動や経年変化があるため、引き続き定期的な観察が必要である。これまでの結果を基に更に汚染箇所とその原因を絞ると同時に、汚染を受けやすい環境条件を考察し、水環境改善の一助となる材料を提供していきたい。



(図4) 伊豆市内狩野川での水質調査の様子

伊豆半島ジオパーク 教育

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育（SDGs/ESD）の推進

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
 (地域経営) 3年 中橋幸作、勝浦寿、2年 綿引駿
 1年 杉山里桜、沼井俊人
 (地域環境・防災) 3年 青木奏磨、1年 福本奈穂
 (アート&マネジメント) 3年 一瀬日南子、辻真衣子
 (スポーツプロモーション) 2年 内山道都、長沼善虎、1年 森万穂里
 指導教員：○准教授 山本隆太、教授 小山真人、講師 内山智尋
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 一般社団法人美しい伊豆創造センター ジオパーク推進部
 伊豆半島ジオガイド協会
 静岡県賀茂地域局
 株式会社伊豆バス
 ふらっと月ヶ瀬
 有限会社オートクラフト・IZU



プロジェクトの報告

伊東の「漁業ワークショップ」(勝浦・一瀬)

日本国内の漁業は、漁獲量の衰退や従事者の高齢化などの問題を抱えている。市内に漁港が四つあることやとれる魚種も多いことから比較的漁業が盛んな伊東も、その例外ではない。そこで学生の立場からできることをと思い、伊東地域での漁業体験&ワークショップを企画・開催した。2022年7月18日に実施したワークショップでは、伊東市の特産品である伊東ナゲットの魅力を伝える方法についても検討した。伊東市役所、富戸漁協の方々、伊東商業高校の様々な方の交流の場を持つことができた。



伊豆新聞デジタル「漁業現状学び課題解決へ 観光特派員商業生5人、ワークショップで議論」—伊東2022年7月20日掲載PS23336-27689

修善寺の「防災サイトの使い方」(青木)

2021年7月、熱海で土砂災害が発生したことを受け、住民が自ら判断し災害から身を守る行動をする事が出来る力を付けられるような防災ワークショップを計画・実施した。修善寺は約一世紀前に北伊豆地震によって大きな被害を受けた場所である。また、防災に関心を持つ地域のステークホルダーに出会うことができ、修善寺で必要とされている防災対策・課題を聞き取った。2022年7月3日に修善寺の居場所ののほなで高齢者向け「防災サイトの使い方」を開催した。



静岡新聞「静大生がスマホ指導 地域の高齢者に防災情報」—伊豆2022年7月7日掲載

中伊豆×焼津コラボの「静岡おくみゆプロジェクト」(中橋)

「おくみゆ」とは、江戸時代に徳川将軍が熱海から江戸まで温泉を運ばせたことに因む温泉運搬を意味する言葉である。「静岡おくみゆプロジェクト」では、中伊豆の温泉運搬業を営む誠商事さんと焼津市観光交流課の協力の下、焼津の「黒潮温泉」を静岡大学に「おくみゆ」した。2022年11月26日、12月3日の足湯を設営し、部活動の学生66名を対象として運動前に足湯を体験することで、足湯とスポーツとの相関を調査した。足湯に入った選手の競技パフォーマンス、コミュニケーションについてポジティブな結果が得られた。



静岡新聞「足湯はいれば運動「向上」」2023年1月7日掲載

伊豆・狩野城の「御城印」デザイン(辻)

近年の御朱印集めブームに次いで「御城印集め」のブームが期待されている中、新たに御城印をデザインすることで観光客を増やすことにつながる可能性があると考えられる。伊豆の狩野城、大見城を見学し、伊豆総合高校の生徒さんや地域のデザイナー勝野さんとコラボした御城印の商品化を行った。私は唐獅子図屏風の獅子と富士山のイラストを作成した。



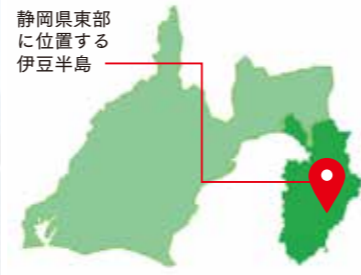
これから取り組むべきこと

伊豆半島はいま、自転車に関する関心が高い。東京オリンピックでは伊豆でサイクリング競技が開催され、そのレガシーを根付かせようと努めている。私たちは、自転車を活かしたツーリズムと福祉・教育の分野にわたって取り組む。ツーリズムについてはスルガ銀行さんと共同でe-bikeツアーを検討している。福祉・教育では、ふらっと月ヶ瀬さんを中心とした場所でオートクラフト・IZUさんのおもしろ自転車を活用したイベントを行う。来年度は、スポーツ分野からの活動に特に力を入れ、地域×スポーツによる地域の健康増進、地域コミュニティの形成など様々な価値が創造されると期待している。

地域概要

伊豆半島は静岡県東部に位置する火山によって形作られた半島です。漁業が盛んな伊東や西伊豆、温泉観光地である修善寺や熱海などがあり、2018年4月には伊豆半島内の15市町による取り組みがユネスコ世界ジオパークに認定された。ジオパークとは、地形や地質またそこに根づく文化や伝統を保全し活用していく場であり、日本国内では現在、ユネスコ世界ジオパークに9か所が認定されている。伊豆半島ジオパークは、現在もプレートの動きによって地殻変動を続けており、火山や地震による様々な資源がみられる。

私たちは、2015年の国連サミットで採択されたSDGsの「誰一人も残さない」という理念に基づいて、伊豆半島ジオパークを活用した自然の保護保全をベースとしながら、地域社会の産業、福祉、教育へと連続する一連の活動を行っている。



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
 私たちフィールドワークメンバーは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

これまでの活動

- 1年目 (2017年度)**
 - ジオパークについての学習
 - ジオガイドとのワークショップ
 - パンフレット作り
- 2年目 (2018年度)**
 - SDGs肉まんの開発
 - ジオパン開発、販売支援
 - 郷土料理についての学習
- 3年目 (2019年度)**
 - 大学生を対象としたツアーの開設
 - VR動画を利用した学習教材の開発
 - 食育教材の作成
- 4年目 (2020年度)**
 - 伊豆におけるサイクリングルートの開発
 - 西伊豆でのオンラインジオツアーの開発
 - 1年生へ向けたガイドツアーの実施
- 5年目 (2021年度)**
 - 松崎でのジオ・クア・ウォーキングイベントの実施
 - 伊豆半島ジオパーク推進協議会と静岡県温泉協会イベント支援
 - 三島での高校生まちあるきツアーの実施

2022年度の活動について

6年目となる2022年度は、コロナ禍にあって集団行動が取りにくいこともあり、学生ひとりひとりがプロジェクトを企画・実施した。学生が学環のコース・領域で学ぶ専門をもとに漁業ワークショップ、温泉コミュニケーション、高齢者のスマホ防災、御城印デザインに取り組んだ。

7月、修善寺にて高齢者を対象にしたスマホや防災アプリの使い方を教える防災イベントを行った。伊東では定置網漁を体験したり魚市場の見学をし、漁業の魅力発信についてのワークショップを行った。

10月にはオートクラフト・IZUさんのおもしろ自転車イベントに手助けをする形で参加した。11月からは2023年度におもしろ自転車のイベントを行う関係でオートクラフト・IZUさんとの話し合いを行いイベントへ向けて準備を進めた。

11月はおくみゆプロジェクトを実施した。

防災サイトの使い方を説明する学生の様子



FM IZみらいずステーションでラジオ出演



デザインについてのワークショップを行う学生の様子

多世代の居場所づくり

多世代の居場所づくりと防災教育の実践

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域共生) 2年 瀧川理越、吉田美空、1年 川原綾花、菊地凜太郎
(地域環境・防災) 3年 山口望、渡邊大翔、2年 木村純、1年 占部暖花、沼崎沙耶
指導教員：○講師 立花由美子、教授 吉川真理、准教授 須藤智、准教授 山本崇記
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
龍津寺
静岡市立清水小島小学校
社会福祉法人静岡市社会福祉協議会

地域概要

多世代の居場所づくりフィールドでは、静岡市清水区の小島地区を拠点として活動をしている。小島地区は、興津川沿いの河岸段丘上にある山に囲まれた自然豊かな地域である。一方、少子化・高齢化が顕著であるという地域課題も存在する。そこで、子どもたちの居場所づくりに取り組んでいる龍津寺を中心に、地域の様々なコミュニティ活動に関わり、子どもから高齢者までの「居場所づくり」に取り組んでいる。



龍津寺（写真1）

これまでの活動

・龍津寺土曜子ども寺子屋への参加

小島町の龍津寺で開催される土曜子ども寺子屋は、子どもたちの主体性が尊重され、子どもたちにとって安心して過ごせる居場所になっている。ここに参加し、論語の音読や勉強の付き添いを通じて、子どもたちと交流を行っている。

・土曜子ども寺子屋での「防災〇×クイズ」の開催

子ども寺子屋の時間を活用し、事前準備と災害発生時に必要な防災知識について、子どもたちが楽しみながら学べるように〇×形式でクイズ大会を実施した。子どもたちが考えながら回答している様子から、小島小学校での防災教育の現状を知ることができた。

・小島小学校での「防災教室」の開催

小島小学校の6年生を対象に、小島地区において発生する可能性のある災害について、防災教室を実施した。教室での講義に加え、実際に通学路を歩いて子どもたちに危険箇所を探してもらった。子どもたちは防災教育の知識を活かし、積極的に活動に取り組んでいた。

2022年度の活動について

1. インタビュー調査

小島文化財を守る会（2022年6月11日）

小島文化財を守る会は、心豊かな街づくりの一環として、文化財を守り、地域発展に寄与することを目的として、見学会やイベントの実施、探訪ウォーキングの開催、古文書の調査、草刈りや花植えを行っている。小島地区には、江戸時代の大名が築いた陣屋跡がある。地域住民は陣屋に対して親しみや誇りを持っていることから、守る会では陣屋を活用して、小島地区だけでなく、^{ただいま}但沼地区、立花地区にある史跡とともに、地域を盛り上げたいと考えている。



陣屋跡から見た小島地区（写真2）

S型デイサービス（2022年6月27日）

S型デイサービスは、社会福祉協議会の推進事業として行われ、高齢者の生きがいづくり、社会的孤立の防止を目的として県内各地で実施されている。小島町のS型デイサービスでは、「おしゃべりの場、集まりの場」の提供を重視している。実際に参加させて頂いた際には、参加者の方とボランティアの方の境なく、ともに楽しむ雰囲気が印象的だった。現在参加者は女性のみであり、男性の参加はみられない。また、有料のデイサービスの増加や新型コロナウイルスの感染拡大、自力で会場まで来ることが困難な人の増加などから参加者が減少している。多様な人々の参加と、より多くの方々の参加を促すためにも、多世代フィールドワークは、気楽に参加できる環境を整えるとともに、若い世代との交流の場をつくっていく必要があると感じた。



S型デイサービスでの活動の様子（写真3）

2. 居場所づくり活動

多世代交流ニュースポーツ大会（2023年4月16日）

多世代交流を目的としてニュースポーツ大会の企画、運営をおこなった。ニュースポーツは、年齢や体力などにかかわらず、誰もが気軽に参加できるスポーツだ。感染症拡大のため、当初の予定から3ヶ月延期し実施した。当日は、子ども連れのご家族や高齢者の方など、幅広い世代の方々が参加してください、玉入れとベタボード、そしてじゃんけん列車を行った。子どもたちだけではなく、大人たちも夢中になって楽しみながら参加する様子が見えた。参加して下さった保護者の方や高齢者の方々からお話を伺うと、「普段関わる機会が少ない世代との交流ができるのは新鮮で楽しかった。またこのようなイベントを開催してほしい。」といった感想をいただき、この企画を通じて多世代が交流できる居場所づくりに貢献できた。



ニュースポーツ大会の様子（写真4）

これから取り組むべきこと

あまり関わりのない世代との交流

これまでの活動を通して、子ども寺子屋を通して子どもたちとの交流とS型デイサービス、小島生涯学習交流館が主催している令和サロンを通して高齢者との交流の機会を得ることができた。さらに多世代にわたる交流を深めるために、中間層である親世代の方々との交流も行いたい。

継続的な交流・参加

これまで関わってきた方々との継続的な交流を行い、信頼関係を強化していく。

新たなイベントの企画・提案

今までに実施した企画・イベントの反省を踏まえた上で、新たな企画を提案していく。

学内地域連携拠点

静大発 地域と大学の連携を広めよう！

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2022年度のもの
(地域経営) 3年 太田そよ香、納吉成
(地域共生) 3年 油井柊斗、2年 古瀬愛優美
(アート&マネジメント) 2年 馬場凜桜
(スポーツプロモーション) 2年 金子涼太郎、近藤優介
指導教員：○特任助教 川崎和也、准教授 山本崇記
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡大学学務部地域連携推進課

地域概要

学内地域連携拠点フィールドは2018年度より活動を開始したフィールドである。私たちは静岡大学地域創造学環（以下、学環と記載）を主な連携先として活動を行っている。

学内地域連携拠点フィールドの活動のテーマは、「つなぐ」である。具体的には、①学環と地域を「つなぐ」、②学環のフィールドおよび学生同士を「つなぐ」ことである。こうした取り組みを通じて、魅力的な地域社会の創造に取り組むことのできる人材の育成に寄与することを目指している。

これまでの活動

学内地域連携拠点フィールドは、2019年度までは静岡大学教育連携室（現在、地域連携推進課）と連携し、『静大発“ふじのくに”創生プラン』（文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の促進を目的として活動を行ってきた。とりわけ、私たち自身が「地域と大学の拠点になる」ことを意識して以下のような活動に取り組んだ。

・地域創造学環ホームページの改訂

学環の魅力を受験生により広く伝えるために、学環のホームページの内容を改定した。夏季オープンキャンパスに訪れた高校生たちを対象にアンケートやインタビューを実施した。さらに学環のフィールドワーク活動の情報発信にあたり、地域系の学部・学科を持つ20の大学のホームページ調査を行った。ホームページの見栄え、動画の有無、更新率などの11の項目を検証し、学環のホームページと比較することで、学環のホームページの良い点、課題点、改善点を明らかにした。その後、これらの調査結果を学環のフィールドワーク委員会に報告し、学環のホームページのさらなる改定に向けた取り組みがなされた。

・オープンキャンパスでの展示企画の実施

学環の広報の一環としてオープンキャンパス（OC）で企画を行いたいとの意見から、夏季OCへの参加およびキャンパスフェスタ（秋季OC）での企画を実施した。企画の内容は、①学環のフィールドワークのポスター展示、②学環1年生への質問コーナー、③フィールドワークで活動する学生たちの写真とメッセージを記載したポスターの展示である。

『静大発“ふじのくに”創生プラン』の終了した2020年度以降は、下記の取り組みを中心とする活動を行った。

・フィールドワークの取材、および活動紹介記事の作成

学環のフィールドワーク活動の情報発信に取り組むにあたって、実際にフィールドワークに同行し、学生たちの活動の様子を取材した。その後、取材した内容を整理し、活動紹介記事を作成した。

・「フィールドワーク交流会」の企画

かねてより、一部の学環の学生たちからフィールドワーク活動についての情報を共有したり、意見交換をする機会が欲しいとの声があったことを踏まえて、学環の学生たちが集い、特定のテーマに沿って意見交換を行う「フィールドワーク交流会」を企画した。2021年度は、「フィールドワーク活動における情報発信」というテーマで交流会を開催することを決めて、その実施に向けて、各フィールドへのアンケート調査を実施するなど、準備に取り組んだ。残念ながら、新型コロナウイルスの感染拡大により、2021年度の交流会の実施を見送ることとなったが、交流会の準備への取り組みを通して、自分たちのアイデアを形にし、それを実現してゆくためのノウハウについて実践的に学ぶことができた。



作成した取材記事



交流会のポスター

2022年度の活動について

2022年度は、引き続き、学環のフィールドワーク活動の取材とともに、新型コロナウイルスの感染拡大によって延期した「フィールドワーク交流会」を実施した。

(1) フィールドワーク活動の取材

清水港周辺地域フィールドの学生たちが企画運営するイベント「スマイル・ロゲイニング」が2022年12月11日(日)に開催されるにあたって、その事前準備および当日のイベントの様子を取材した。

2022年12月1日(日)、清水港周辺地域フィールドの学生たちが、実際に現地に足を運んで事前準備をする様子を取材した。彼らと一緒に本番のコースを歩いてめぐったり、実際にコースを歩いて明らかになった課題点などを洗い出したり、解決策についての話し合いを行ったりする様子を取材した。

2022年12月11日(日)の本番では、イベントの様子を観察するだけでなく、学生やイベント参加者たちにお話を伺った。また、取材活動だけでなく、イベント運営のお手伝いもさせていただいた。



取材の様子

(2) フィールドワーク交流会の開催

2022年10月20日(日)、「フィールドワーク活動における情報発信」をテーマとする「フィールドワーク交流会」を開催した。2021年に各フィールドに向けて実施した情報発信に関するアンケート調査の結果を報告した後、フィールドワーク活動におけるSNSの特徴や運用方法、成果や課題、可能性について、グループワークの手法をとりながら意見交換を行った。交流会を通じて、普段は関わることのない他のフィールドの学生と話し合い、考え方を共有することができた。ここで交わされた意見は、それぞれのフィールドの活動においても活かすことができるものばかりで、今後のフィールドワーク活動の更なる展開を期待できる、とても内容の充実した交流会であった。



交流会の様子

これから取り組むべきこと

これまでの活動を踏まえて、学内地域連携拠点フィールドが今後取り組むべきことは、次の3点である。

(1) 「フィールドワーク交流会」の継続

2022年度に実施したフィールドワーク交流会を継続して開催していく。また、今年度の開催における反省を活かすなど、よりよい交流会の実施に向けた話し合いを行う。

(2) フィールドワーク活動の取材の継続

積極的な取材活動を行ったことで、取材から記事作成の手順の基盤が強化された。学生や地域の方に知っていただくため、引き続き、学環のフィールドワーク活動の取材を実施する。

(3) 新しい企画の検討

2023年度はフィールドワークのメンバーが4人となり、フィールドとしての最後の1年の活動となるので、新しい企画の検討を行い、実施につなげていく。

これまでは学環のフィールドおよび学生同士を「つなぐ」活動を中心に取り組んできたので、以上の活動を通して、これからは学環と地域を「つなぐ」ための契機となるような活動を行っていきたいと考えている。

2022年度に2年半の活動を終えた学生たちの 声を紹介します！

～地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと～

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は、1年次後期から2年半、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をします。2022年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声を集めました。

清水港フィールドワークではこれまで街歩きや地域の方との交流を通して、地域が抱える課題や地域の魅力などをまとめてきた。初めの頃は話し合いが多く、SWOT分析やクロス分析といった分析方法から課題解決に向けた手順を学ぶことができた。特に最後の1年は先輩方の提案である「フォトログイニング」を実際にイベントとして実施することを目標に活動を進めてきた。その中で地域の方と意見交換会を行い、地域の人が望んでいることを元に必要な働きかけを考える力を養うことができた。また、地域の方々が私たちのような若者に大きな期待を寄せていることを強く感じる機会となった。2年半のフィールドワークを通して得た経験を今後の活動に活かしたい。

清水港フィールド 澤田 美咲



フィールドワークでは、主にグループで行動することが多く、連携をとることの大切さと難しさを学んだ。伝わっていると思っていたことが伝わっていないといった情報共有における問題点と、確認不足のまま進んでいったことにより、ミスが起こるといった確認におけるミスが見られた。細かく伝えることや、連携を取り確認を確実にしながら物事を進めていく大切さを実感した。関わる人からすれば、同じ静大生として見られるため、グループ内の誰かに伝えていないと、さまざまな問題が起こってしまう。情報共有と進捗状況を全員が確認し、全員の方向性を揃えながら活動していく大切さを学んだ。

また、さまざまな会議に出席させてもらえたことで、まじくりをしていく裏側の難しさを見ることができた。会議では、学生が考えていることと、地域の人が考えていることが違うことが多々あり、その経験から、地域の人の視点に立って考える大切さを学ぶことができた。

庵原フィールド 佐藤 啓介



おまちフィールドでは、おまちバル実行委員会の方々と「静岡おまちバル」というイベントを開催し、その中でも課題とされていた若年層の誘致をフィールドワークの目標としていた。活動を通して若年層と高年層のマーケティングの違いに着目することを学び、広報活動やフライヤーの作成、チケット販売など、イベントを主催する経験ができた。最後には学生が主体となってコンセプトバルを開催することができ、フィールドワークとして一歩前進することができたと思う。その反面で、地域とのつながりの希薄化も気になった。コロナ禍で対面での活動が制限されていた中ではあったが、私はこのフィールドワークの経験から、地域の人との交流は親睦を深めるだけでなく、意見のすり合わせの場でもあり、今後の活動内容を左右する大事なコミュニケーションであることを学んだ。来年度からは対面の活動が解禁されると思うので、先輩たちの今後の活動に期待したい。

おまちフィールド 武田 小真智



商店街の方々と関わりの中で幅広い年代の方々と交流があった。特にイベント時には小さな子どもからお年寄りの方まで対応することができた。その中で相手の立場に合わせて対応することの重要性を学ぶことができた。私たちは学生視点のイベント運営などを行っていたが、対象は子供や家族連れが多かったため、どのようなコンテンツにするとより集客率が上がるか、チラシの文字はどこまでふりがなをつけるべきかなど考慮すべき点が多かったと感じた。それらを通して自分達が当たり前だと思っている部分も、立場が異なると当たり前ではないと言うことを知ることができた。この経験からフィールドワークで企画を考える際や就職活動中にも多角的な視点で物事を捉えることができるようになったと感じた。

浅間通り商店街フィールド 増田 裕奈

2年半のFWを通じて焼津市のことやそこに住んでいる住民の考えを知ることができました。学ぶこと全てが新鮮で、過疎化している現状を私たちがどう解決していくことができるのかを話し合ってきました。特に印象に残っているのは、『帆や』を見学し、お話を伺ったことです。焼津市浜通りは、小泉八雲の歴史が多く残っている場所であり、そこを観光として売り出せないかと考えていました。私たちではそこまで持って行くことはできませんでしたが、これから代を重ねることにより深い議論が行っていきけるのではないかと私は思っています。先輩から受け継ぎ2年半培ってきたものは、下の代へとつながっていきいつか焼津市浜通りが人で溢れるようになることを願っています。私はこのフィールドワークを通して問題を主観的に分析することだけでなく、客観的に解決に導く必要性を感じました。フィールドワークで得た学びをこれからも地域活性化へつなげていきたいと考えています。

焼津市浜通りフィールド 芝原 一貴



浜松文芸館の周りは、駅が近く栄えています。しかし、横道に入れば古い建物があったり、自然があったりする不思議なところ。それを見つけた時の冒険をしているような面白さは、意識しなければ気づけなかったことです。浜松文芸館での活動は、文芸というテーマが中心になります。難しく感じますが、私はここでの活動によって「日常の小さな魅力発見」が地元への愛情につながることを学びました。そして、その発見を言葉や絵で表したとき、人は簡単に文芸に触れることができます。その機会を提供するため、浜松文芸館を拠点に、まちなかを舞台にしたワークショップを2回開催しました。いちから企画を考え、実現させていった経験は、私の計画性を向上させてくれました。

浜松文芸館フィールド 増元 明日菜

私は佐久間フィールドワークを通じて、胸を張って静岡は素敵な場所がたくさんあるよと言えるようになったと思います。地域創造学環の学生として実際にひとつの地域を想い行動や活動を起こすという経験は、学びに実感を持つことにとっても役に立ちました。佐久間のひと、自然、コミュニティ、団体の方々、沢山の好きに行くたびに発見することができました。毎回フィールドワークの度に、佐久間にしかない美しい自然や人、特産品に触れ、私達の学びを育ててくださり、お世話になった方々へ感謝しかないです。サクッと佐久間作りを通じて取材をすることが多かったのですが、ただの観光では感じられない地域の方の思いを知ることができました。学環に入ってやりたかったことはこんなことだな、と感じられた経験でした。

佐久間フィールド 齋藤 しずく



とうもんの里でのフィールドワークを通して、自然で遊ぶことの楽しさを知りました。そして、その自然を守っている人たちの姿を間近で見て学ぶことができた。その地域の中で活動をしていく中で、地域の中で大学生の私たちが与えられるものは何かを学ぶことができました。今までは、何も考えず地域の中で生きてきました。しかし、少し視点を変えて地域のことを見てみると、私たちにしかできないことがありました。地域が望んでいることを地域の方々と協力し、私たちの個性を最大限利用することで、地域の中で活躍することができました。この経験から「自分の可能性」に気づくことができました。2年半前の私からすごく成長したと思います。地域の方々の熱い気持ちや考え方が私の成長につながりました。とうもんの里で培った経験は私の人生の中でかけがえのないものになっています。この経験を私たちが子どもたちに伝えられるようにしていきたいです。

とうもんの里フィールド 舟山 海里





2年半のフィールドワークを通じて地域創生におけるスポーツの可能性を感じることができました。御前崎フィールドでは「御前崎スポーツ振興プロジェクト」を連携先のひとつとし、スポーツを通じて地域課題の解決をめざし活動してきました。この活動の中でスポーツイベントの企画・運営やフットゴルフなどのニュースポーツを体験させていただき、地域資源を活かしたスポーツが市民の健康づくりやスポーツ誘致による地域の活性化につながることを実感しました。また、コロナ禍でのイベント運営のやり方や事前準備の必要性など数多くのことを学ぶことができ、フィールドワークは私たちの学び・成長に必要不可欠なものであったと思います。

これまで私たち学生のためにフィールドワークにご協力して下さった御前崎市の皆様、本当にありがとうございました。

御前崎市フィールド 宮崎 絢士郎

私はフィールドワーク活動を通して、変わるべきなのは地域ではなく、私たちのような地域に関与するディレクターだということを学びました。それは、地域に新しいシンボルや観光資源を作らずとも、地域そのものの良さを伝えるコンテンツで、地域の魅力は広く伝わることを体感したからです。また、一般的な学生が作るクオリティの仕事ではなく、いいものを届けたいという信念を貫いた部分で、特に成長できました。実際に本気でぶつかってくる私達の姿を見て、町の人もさらに熱量を持って協力して下さるようになり、期待値を更新し続けることができました。このような経験より、地域の潜在価値を見出し、最大限発揮できるようなマネジメント力と実行力を持つ地域のクリエイティブリーダーを目指していきたいです。

松崎町 商店街フィールド 稲垣 望美



地域のことを知っていきながら、行政の施策に関わる「防災」や町で大きな収益を上げている「観光」という面で、大学生がアプローチできることは少ないのではと感じることもありました。しかし地域の方にお話を伺うなかで、大学生だからこそできることがあり、初めから大きく行おうとしないでまずやってみることの大事さを知るようになりました。活動するなかでは関係構築や企画実行など、すべてにおいて0から1を作り出していくことの難しさを感じました。また様々な立場の方とやり取りさせていただくなかで、双方の立場や状況を考えながら関わっていくことや、積極的に地域に働きかけていくことの重要性を学ぶことができました。一方で、地域にどのように貢献できたか、地域の方の反応を直に受けられなかったことがやり残したと思います。様々な経験をさせていただきことに感謝し、活動で得た経験を活かしてより一層地域社会に貢献していきたいです。

松崎町 観光と防災フィールド 田丸 結珠



大人数で活動をするという経験がなかった私にとって2年半のフィールドワークはかけがえのない経験となりました。学生を温かい目で挑戦を見守ってくれた地域の皆さんや先生方に支えられ、やりたいことを精一杯挑戦させていただいたこの稲垣は気づけば愛着を感じる特別な場所になっていました。また活動の中で大学生とは言えども、地域の方の協力のもと目標に向け取り組む中で、自分がどうすべきか、どんな風にメンバーで進めていくべきか責任感を持って思考し続けるという貴重な体験をさせていただきました。私たちの活動が地域にとっていいものになっているのかなど、悩まなかった時はありませんでしたが、ここまで走り抜けて、あっという間だったし今、やり切った達成感はとても大きいです。このフィールドワークで出会えた方々や得た経験はこれからも活かしていきたいです。

東伊豆町フィールド 中垣 乃彩



防災まち歩きという、WEBマップを使用する子供向けの防災啓発活動を通して、多くの方々の支援がなければ活動を継続したり発展させることはできないということを学びました。フィールドワークの指導教員である小山先生と西伊豆での対応者の仲田慶枝さんや、参加者の小中学校の皆さんだけでなく、神社の宮司さんまで私たちの活動に協力して下さることで、フィールドワークの内容がより充実したものになり、同時に課題も解決するものになりました。社会に出た際も、関係者の方々への感謝を忘れずに活動していこうと思えました。

また、狩野川の水質調査では栗原先生の指導の下、サンプリング・分析法について学ぶことが出来ました。土地利用や自然環境、生活排水と水質の関連性を探る中で、より環境保全について考えることが出来たと感じています。

ジオパーク 保全と防災フィールド 木村 瑠羽



主体的に「考動」することを学びました。活動開始前、伊豆半島には多くの課題があると聞いていました。実際に巡検を繰り返すなかでそれらの課題は巨大で複雑であり、「大学生単体の活動では根本的に何も変わらないだろう」と痛感しました。そこで、自分から関係するステークホルダーに働きかけ、温泉資源のスポーツ分野への利用を提案しました。すると、多くの方々が私の考えに共感して下さりました。そして民間・行政を含めた多方面からの御協力をいただき、多くの方を巻き込んでアイデアを形にすることが出来ました。このことから、私は自分の頭で考え、働きかけることが、そのプロジェクトを本当に意義のあるものにするのだと学びました。

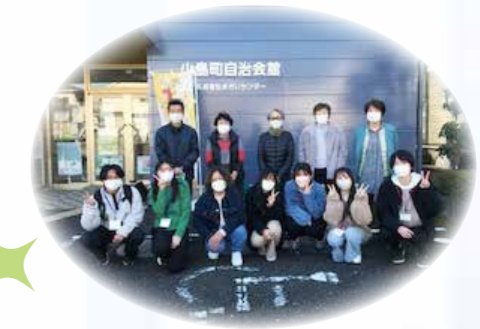
フィールドワーク活動を通して、私は人を巻き込んでプロジェクトを進めることができるようになりました。今後も、お世話になった方々への感謝を忘れず、より大きく困難な課題に立ち向かっていきたいです。

ジオパーク 教育フィールド 中橋 幸作

私は清水区小島町を拠点に2年半活動してきました。2年半前から小島町での活動を始め、最初は地域にどのように入り活動すればいいのか分かりませんでした。しかし活動の拠点である龍津寺の勝野住職をはじめとする地域の方々のご協力からフィールドワークとして様々な活動を行うことが出来ました。特に小島小学校で行った防災教育・防災まち歩きは印象に残っています。地域と学生の繋がりがからこの企画は生まれました。当時私は二年生ながらも防災専攻という立場から積極的に活動しました。子供たちの反応を見ながらの講座や、防災的な視点を入れたまち歩きは難しかったですが、子供たちの成長の一助になったのではないかと思います。

この2年半のフィールドワークでは貴重な体験を多くさせていただきました。この経験を社会に出ても活かしていきたいです。最後に私たちの活動を温かく見守って下さった小島の皆様、本当にありがとうございました。フィールドワークの活動はこれからも続きますのでこれからもよろしくお願いいたします。

多世代の居場所づくりフィールド 渡邊 大翔



フィールドとフィールドを“つなぐ”役割として主にフィールドワークの取材担当として携わらせていただきました。様々な方々と会う中でそれぞれのフィールドが抱える地域課題や解決方法が地域によって異なることが分かりました。地域にはその地域にあった課題解決策がある、これが一番の学びでした。その他にもインタビューやアンケート分析など今後の学びにつながる成長も実感しました。後輩たちには地域に実際に飛び込んで様々な人々と出会いながら世界を広げてほしいです。そして実践的に学ぶ楽しさをお楽しみしながら全力で学び続けてほしいと思います。2年半ありがとうございました。

学内地域連携拠点フィールド 納 壺成

地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさんの声をご紹介します！

地域創造学環のフィールドワークは、多くの地域の方々にご協力をいただいています。
今回も、フィールド活動でお世話になっている方々から、これまでの活動についてお伺いしました。

※表記のご所属、お役職名等は2022年度のもの

清水港周辺地区フィールド

活動体験の可視化 「スマイル・ロゲイニング」

PDCAサイクル的に、今まで「PLAN→どうしよう？」から「PLAN→可視化しちゃいました！」に。

昨年、学生が「スマイル・ロゲイニング」実行宣言。一抹の不安がよぎるが伴走へ。学生が共感を得る企画作成から、助成採択された運営資金を手に、当日運営、最後は活動評価まで。サイクルを回し、目も回る。

言葉をカタチに見える化した活動体験は、子どもたちや多くの関係者を笑顔にし、達成感も。そして、ふりかえりにより、新年度の課題解決がより地域密着、学生活躍の充実になることを期待。

有限会社都市環境デザイン研究所 代表取締役 木村 精治 様



庵原フィールド

昨年は学生のコミュニケーション力と個々の人間力の向上について書かせていただきました。今回は計画力と実行力について感じたことを書きます。

1月に「いはらフェス」という道の駅実現に向けての地域イベントを住民の皆さんと一緒にしました。学生の皆さんは立案の段階から、検討、準備、実行に移して当日は大成功となりました。経過の中でコミュニケーション力がついた学生が住民の皆さんと自発的に意見交換や掲示物の作成案などを提案し、地域から頼られる存在になっていたことに気づきました。頼られることは信頼されている事でもあり、もう一つ言えば、学生が一生懸命取り組む姿勢もその要因だったと思います。関わりを持つ私としては非常に誇りに思いました。

公益財団法人静岡市まちづくり公社
健康スポーツ課 課長 酒井 政幸 様



おまちフィールド

地域創造学環様との協働開始より丸3年となった2022年度は、集大成の「学生による自主バル企画」の実施でした。

「秋の甘味巡り～スイーツ小町～」と称し、2022年11月11日～20日開催「オール静岡秋バルWeek2022」と同時開催のスイーツバルです。

店舗開拓、バルMAP作成、チケット発売などを通じ、「企画」「営業」「プロモーション」「販売」など社会での事業活動の基礎を苦労しながらも学んで頂きました。

本活動を通じ、新しいことを成し遂げることの楽しさ、難しさ、達成感などを、卒業後の社会でも、ぜひとも体現してってください。

静岡おまちバル実行委員会 実行委員長 松下 和弘 様



浅間通り商店街フィールド

買い物ひとつとっても人同士の接触が減ったこの時期、商店街をフィールドに選んでくれたことを嬉しく思っています。22年度は休止していた「わくぐりさん」「長政まつり」の二大イベントを規模縮小ながらも実施できました。止めるのは簡単ですが再開は難しいものです。はじめてのイベント参加に学生さん達も分からない事ばかりだったことでしょうか。

やってみると、待ちかねたようにたくさんの来街者があり、人とのふれあいの楽しさ、ありがたさを実感できました。今年に入り大河ドラマ効果もあり賑わいを取り戻して来ます。次年度も、商店街について一緒に考えてみてください。若い感性に期待しています。

静岡浅間通り商店街振興組合 理事 原木 公子 様



焼津市浜通りフィールド

2022年は3年ぶりに「浜通り夏のあかり展」が開催され、浜通りに賑わいが戻ってきたように感じます。皆さんには行灯制作に御協力いただきありがとうございました。皆さんのような若者がまちづくりに参画していただくことが地域の活性化に繋がりますので、今後も焼津市及び浜通り地区の活性化に向けた活動に協力していただけることを期待しています。

焼津市政策企画課 統括主幹 小野田 吉男 様



浜松文芸館フィールド

とにかく元気もらいます。普段、あまり若い人々と接することのない浜松文芸館ですから学生の皆さんに元気もらいます。若い人たちに少しでも振り向いてもらえるよう一緒に考えてくれました。楽しかったです。フィールドワークやガチャ俳句の企画実践は大変でした。でも、おかげで小学生のリピーターが増えました。浜松市民文芸の裏表紙は今年度も俳人（はいと）君とことばちゃんです。とても好評です。これからもぜひ浜松文芸館に元気をください。

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館長 鈴木 隆之 様



佐久間フィールド

佐久間町で養殖しているアワビの殻を使って、皆さんが地域の方のために何ができるのかを真剣に考えていた姿がとても印象的でした。2022年11月に地域の子どもたちに向けてワークショップを開いて頂きましたが、それは正に、地域にあるものに付加価値をつけて地域に還元する活動だと思います。参加者を集めるために協働センターや学校にアポイントをとり、チラシを配布するなど、主体的に活動に取り組んでいらっしゃいました。イベントを企画して、集客して、実施した経験を通して感じたことが、今後の皆さんの活動に活かされることを願っております。ありがとうございました。

浜松山里いきいき応援隊 青島 翔平 様



とうもの里フィールド

毎年フィールドワークの最終日に、学生主催の報告会が開催されます。1年生は、初めて出会った地域の印象を自分なりの視点で捉えての報告です。2年生は、メインイベント「キッズフェス」を通して自分が学んだこと。3年生は、15回のフィールドワークを通じて自分の成長を見つめます。みんなの口から聞かされる「とうものへの思い」これにいつも感動します。学生たちから与えてもらっている愛を、大事に育てたいとうもの里です。

NPO法人とうもの会 理事長 名倉 光子 様



御前崎市フィールド

7月のマリンスポーツフェスタ、10月のストライダーエンジョイカップ御前崎ステージは、いずれのイベントも市内外の子どもたちを対象としたスポーツイベントでしたが、静岡大学の学生たちが、当日の運営に携わり、会場を大いに盛り上げてくれました。あらためて感謝を申し上げます。学生たちにとっても、イベント運営のノウハウを実践的に学ぶ良い機会になったことと思います。御前崎フィールドワークは、今年で5年目となりましたが、これからも賑わいの創出と魅力あふれるまちづくりを目指し、産・学・官・民で連携して取り組んでいきたいと思います。

御前崎市役所 企画政策課長 清水 正明 様



松崎町フィールド

今年度は2つのチームとも、新たな活動の展開を模索する年だったかと思えます。「観光と防災」チームはスタンプラリーにより子どもたちに地元の魅力を知ってもらおう取組を、「商店街」チームは高校生と共に居場所づくりへの取組を、それぞれ企画し実行してくれています。

距離の離れた場所での活動は、なかなか思い通りにいかないことも多いですが、遠慮なく地元を利用してもらい、一緒に楽しい活動を続けていきましょう。

松崎町企画観光課 係長 齋藤 一憲 様



東伊豆町フィールド

先輩たちが築いてきた東伊豆町のみなさんとの関係性を活用し、フィールドワークで地域を訪ねる意義を深めてもらうことができました。

自分たちの活動を地域で実際に形にすることやチームで取り組むことの難しさを感じられたこともきっとこれから社会に出るうえで重要な経験だったと思います。

また、フィールドワークの時間外でも地域の応援に駆けつけてくれたり、地域で起こっていることを気にかけてくれたりと自分たちが通っている地域に責任を感じながら関わってくれていることがみなさんの行動からすごく伝わってきました。

ぜひこのご縁を未来につなげていきましょう！ここからが新しい地域との関わりスタートです！

合同会社so-an 代表社員 荒武 優希 様



ジオパークフィールド

普段同じ地域にいても関わらないお年寄りや障がいのある方と子供達等世代や違いのある人たちの交流ツールとしてのおもしろ自転車の可能性を模索する中で始まった活動ですが、学生達からスポーツや経営、防災や地域振興等様々な角度から様々な意見が出てくることもあり、毎回新しい気づきや可能性が見つかり、今後どのようにこの活動が発展していくか非常に楽しみです、期待もしております。

まだ始まったばかりのプロジェクトですが、先生方をはじめ協力してくださっている企業様や地域の方々、学生達にとっても具体的にメリットのある活動になるよう協力していきたいと思っております。

有限会社 オートクラフト・IZU 専務取締役 高田 二郎 様



多世代の居場所づくりフィールド

わが町おじま小島に関わってくださった皆さん、ありがとうございました。子どもたちや長老方に目線を合わせて、ただそこに一緒にいる喜びや、分かち合いで生まれる皆さんの笑顔は、本当に素敵でした。

地域という世代などの属性で考えがちですが、どうか目の前の誰かの「苦や孤」にも敏感な人でいてくれたらと願っています。黙って聴いてくれるだけで、ただ心配してくれるだけで、たとえ問題が解決しなくても、それは大きな支えになります。そんなつながりのある町が、やっぱり幸せな地域なんだと思います。子どもたちに、胸を張って未来と倫理観を語れる大人でいてくださいね。

龍津寺 勝野 秀敏 様



静岡大学 地域創造学環 2022年度フィールドワーク報告会

日時 2023年5月25日（木）10：00～14：45

場所 グランシップ 会議ホール・風

【司会、舞台係等、報告会準備係】

（地域経営）3年生 桂木健伸、上村崇、高野美羽音 2年生 岩田啓佑、杉山里桜

（地域共生）3年生 古瀬愛優美、村宮汐莉

（地域環境・防災）3年生 小林芽吹、木村絢

（アート&マネジメント）2年生 大木琴寧、山本陽大

（スポーツプロモーション）3年生 鈴木壮悟 2年生 大石凜里花、利根川悠太

※学年は開催時のもの（2023年度）

静岡大学 地域創造学環 2022年度フィールドワーク報告書

2023年5月22日発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 学務部地域連携推進課 地域創造学環係

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】

静岡大学 地域創造学環 アート&マネジメントコース 日名子ゆり
